

～ 生きた体験の証～



アフリカ各地、インドでの  
ミッショナリーとして

# 導かれて

ランキン洋子





東京衛生病院看護学校、卒業式にクラスメイトと（右から2人目が洋子）



A. M. C. の裏庭で子犬と… (1970)



A. M. C. で宮城苗子さんと (1970)



A. M. C. のミッシヨナリドクターたち  
(1970) 左から Dr. キザイヤー、Dr. バウ  
アー、Dr. ウッズ、Dr. クリステンセン



ジェームス 1 才



ジェームス (20 才)、イノシシの子供と



ジェームス (主人) と友人 (1970. 名護)

結婚式（沖縄、那覇教会）にて





ザンビヤ、結婚直後 (1970)



ザンビヤ、リバサイドファーム。  
洋子クリニックで働く (1971)



ザンビヤ、村人と (1972)



アフリカの台所。週末に近くの村  
に伝道に行った時のことです。



青空教会。ザンビヤの農場 (1973)



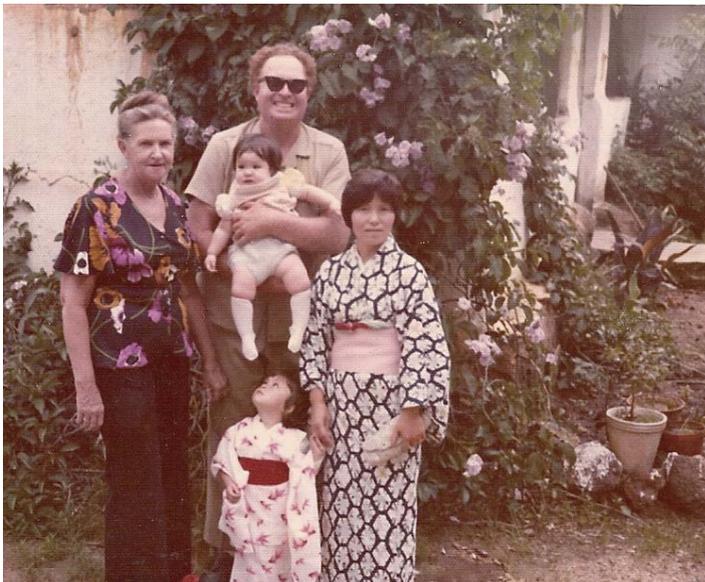
ザンビヤ、ガブンバイパー（毒蛇）と



ザンビヤ、リサ3ヶ月



マリア1才の誕生日 (1974. 12. 27)



クリスマスのに義母と一緒に (1974)



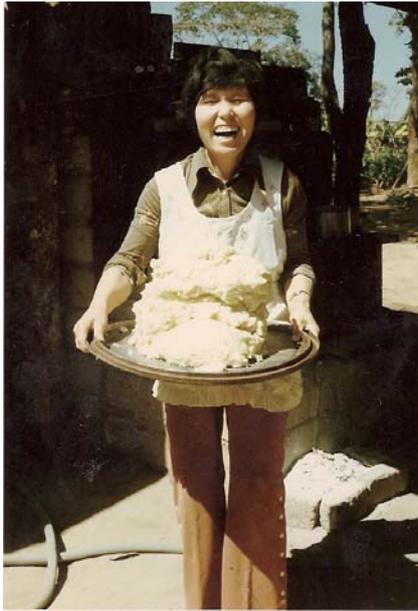
義母とリサ3才



リサ3才。ザンビヤ (1975)



ザンビヤ、鶏小屋の中  
にいたコブラ (1975)



アフリカ人の常食で日本人のご飯と同じ。ザンビヤ、ンシマ(コーンミール)



ザンビヤ、リサ3才、マリア2才 (1975)



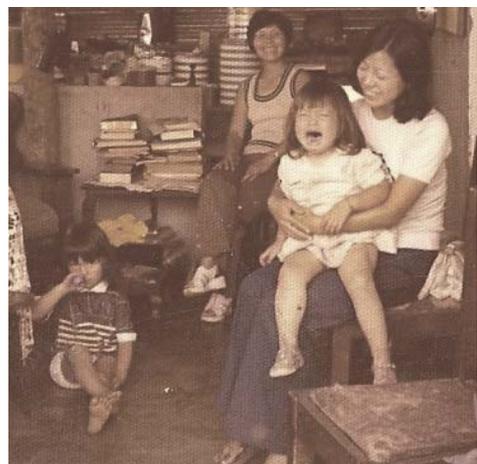
ザンビヤ、ダムにて魚釣り (1976)



マリアとラッキーボーイ (ペット)



ジェームス、ハンティングの練習



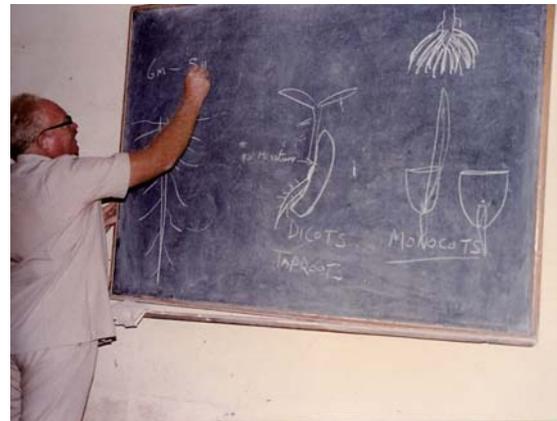
マリア、NOT HAPPY... 日本からのお客様とザンビヤ (1976)



ソルシ、Happy Family! (1980)



ソルシ大学 チャペル、安息日



ジェームス、アドラ農業コースクラス (1985)



ソルシ大学、アドラコース  
卒業式前の教会



サイ、ジンバブエにて



ソルシ、アドラガーデンにて ジェームスとスティーブ、ボーキン  
(U. S. A. からの学生) (1985)



ソルシ、コパー（リサの愛馬）に  
乗るマリア



ハワンゲ自然動物園でロバに乗  
るマリア (1986) …マリア、振り  
落とされてしまうというハプニ  
ングもありました。



ジンバブエ、ソルシーリサとマリアの友達と



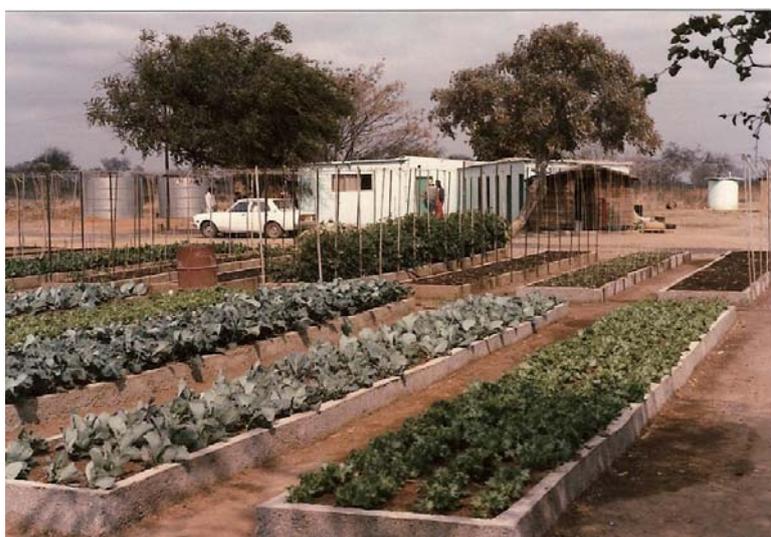
ソルシ、娘たちと (1986)



ソルシ、ジェームス コーンロースト (1986)



マリア、コーンロースト



アドラトレーニングガーデン、ジンバブエにて (1988)



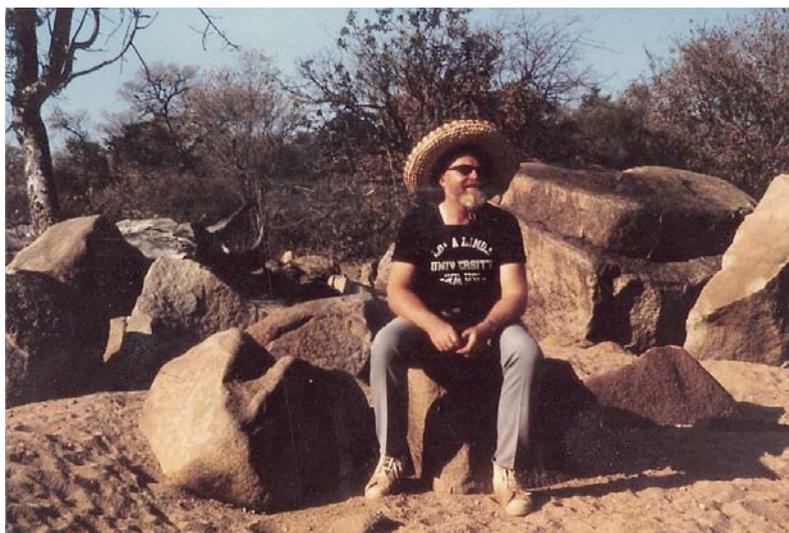
ソルシ、オーバーチャンと孫娘たち (1988)



アドラ サイエнтиフィック  
ガーデンの看板



デンマーク動物園の  
入り口にて



ジェームス、マトポヒルにて (1988) ジンバブエ



西アフリカ、ガーナ、カサバの  
餅つき (1988)



リサとオリバー、ミャンマーの主人が息子のように愛した学生です。  
今はアドラで働いています。



西アフリカ、トーゴ、クロバテメ村にアドラのトレーニングセンターを建設 (1991)



トーゴ、フォーエバー教会にて証（メイドのアヒが通訳）（1991）



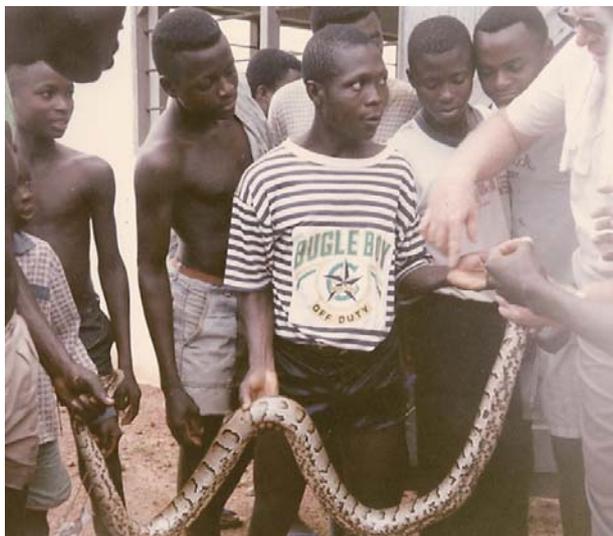
ルワンダ、ビソケ山頂のゴリラ1



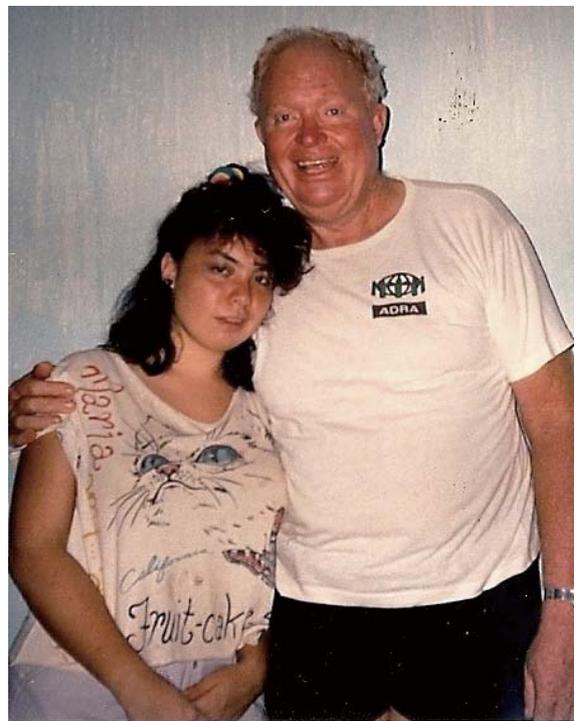
ルワンダ、ビソケ山頂のゴリラ2



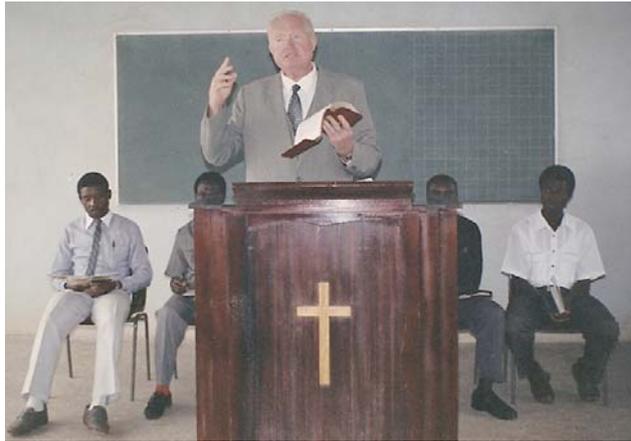
ジェームス、ガーナにてデモンストレーション



トーゴ、パイソン（錦蛇）（1992）



トーゴ、ジェームスとマリア（1992）



ガーナ、ジェームスの説教 (1992)



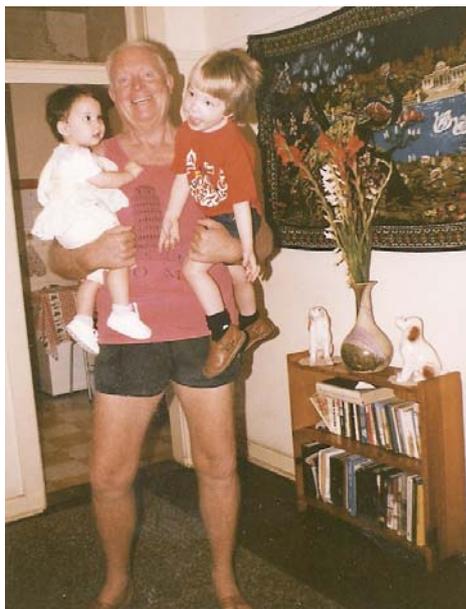
ジェームスと洋子 (1992)



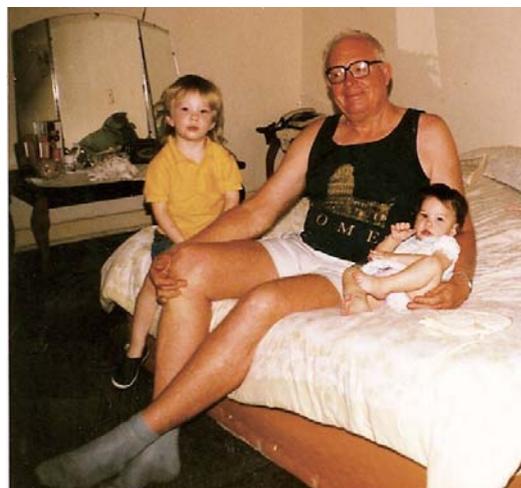
トーゴ、海水浴の後 (1992)



南アにて、オジーサン (ジェームス) と孫たち (1993)



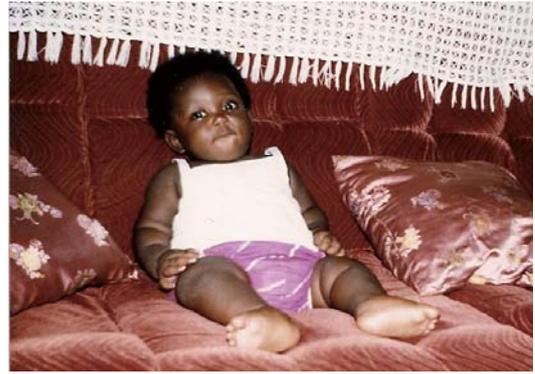
ハッピーおじいちゃん



主人と孫たち



ピーターとアヒ、ミリアム



トーゴ（西ア）、アヒ（メイド）  
の子供



ジェームスの愛車（リキショー）インド



トーゴ（西ア）、ジェームスと洋子



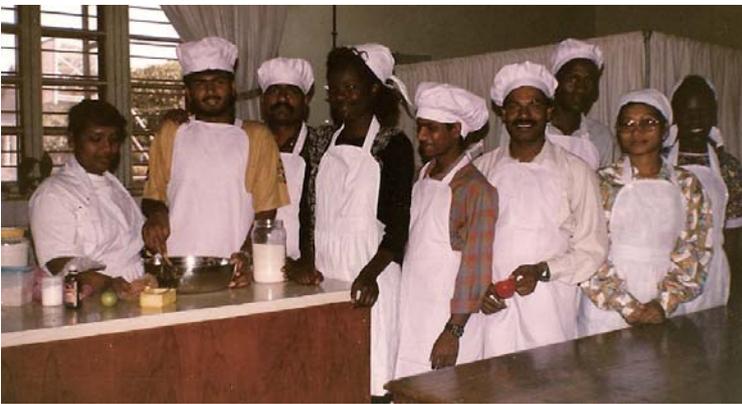
トーゴ、パイソン（錦蛇）…  
ウィッチダクターの薬にもなる



インドにて…乗るのが大変でした！（1994）



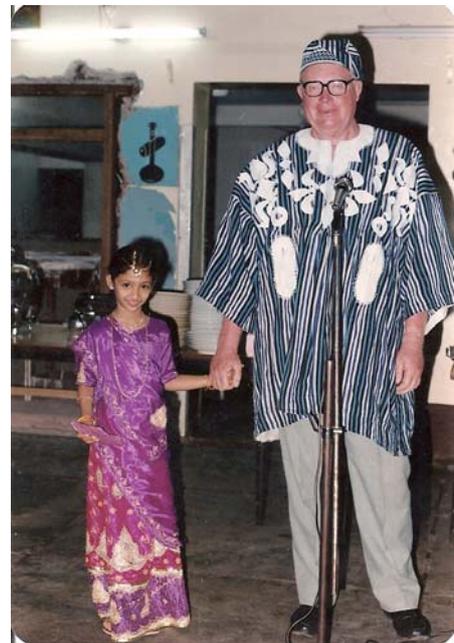
インド、スパイサーカレッジ  
マリア（学生）と洋子…安息  
日はサリーを着て教会へ



インド、スパイサーカレッジの家政科の学生  
たち。ほとんどが神学部の学生



3人のミャンマーの娘たちとリサ、マリア（中  
央）（1994）



インド、スパイサーカレッ  
ジにて、ジェームスとビュー  
ティーヤングクイーン



インド、ジェームスの葬式 (1994)



三育学院のコワイヤー ルーマニア、クリスマスキャロル (1995)



ハンガリー、ドナウ河を背に… (1995)



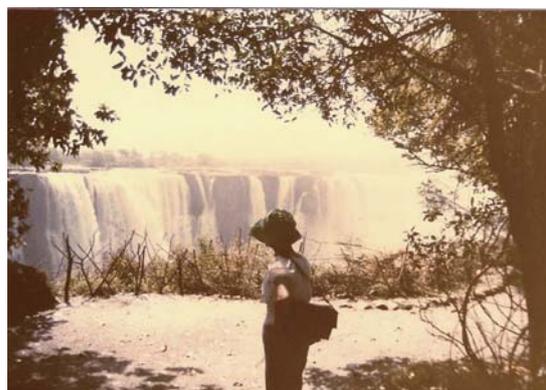
三育学院、卒業式 (1996)



ユーチパインズ、ライフスタイル  
カウンセラーコース 洋子の修了  
式の日 Dr. アガサと (2001. 6)



ウェールス古城跡



ビクトリアの滝



南ア、ライオンパークで孫娘ミシーと



3人の孫たちと赤ちゃんライオン

## 初めに

わたしがこの本を書こうと思ったのは、1997年に日本のサイنز紙に出版社の初めての試みとして漫画“導かれて”と題してアフリカ、インドでのミッシヨナリーとしての様々な不思議な体験と摂理によって持ち運ばれた見えない神の御手をはっきりと見させて頂いたことに由来し、自分だけの体験として記憶にとどめて置くだけでは勿体なく、小さな一人の日本女性が余り多くの人々が体験出来なかった、不思議な導きを本に書きとめることによって、見えない力が私たちの人生に大きく係わっていることを証し、神を崇めることが出来たらと考え、祈りのうちにこの夏休みを利用して書きとめたものです。

また、サイنزの漫画の記事を興味深く読んで下さった方々の中からもっと詳しく知りたいので本にして…という要望もあり、つたない筆ながら記憶の消え失せないうちにと書く決心をしたのです。

24年間、私とミッシヨナリーの旅を共にしてくれた、亡き夫ジェームスと二人の娘たちリサと MARIA に、また私を支えてくれた友たちに、感謝と共にこの本をささげます。

2008年 8月7日

CA. Angwinにて

ランキン洋子

# 目次

初めに	17	バオバブの木	48
第1章 就職	20	バブーンの話	48
宮城県の片田舎から仙台へ	20	ジェームスの生家への旅	48
		マラリヤの発作	50
		カバの襲撃	50
第2章 受験	23	第5章 ムアミ ミッション	52
入試	23	ルニケ村の伝道	54
看学での三年間	24	ハンセン氏病(ライ病)	55
バプテスマ	25	リサとニワトリ	55
神の召命	27	招かれざる客	56
第3章 沖縄へ	28	毒矢	56
A. M. C. での働き	29	ストームの中ザンベジ河を渡る	56
出会い	29	野宿	57
1970年1月	30	ザンベジ河	57
デート	32	カヌーで大河を渡る	57
プロポーズ	33	一難去ってまた一難	58
祈りの日々	33	臨死体験	58
夢のお告げ	34	第6章 夫の生家で(ミエングエ・ファーム)	60
ジミーの願い	35	リサと赤ちゃん	60
決心	36	毒蛇からの救出	60
父との最後の別れ	37	大蛇との戦い	61
結婚式	38	パディ おじさん	62
1970年7月4日	38	コブラ	62
披露宴	40	ブラックマンバ	63
ハネムーン(香港)	41	ナイトアダー	64
香港	41	ジャングルのハンティング(狩り)	64
チェンワン・ホスピタル	42	火消し	65
結婚詐欺?	42	飲料水	66
		魚釣り	66
		ピクニック	66
第4章 アフリカへの旅路	44	教会	67
インド(ボンベイ)	44	ポテトの奇蹟	67
ケニヤへ	44	クリスマス・イブの火事	68
ザンビア	45	スコットランドウエールズの旅	69
ザンビア共和国	46	スウェーデン デンマークの旅	70
リバーサイドファーム	47	アフリカ笑い話	71

第7章 日本へ……………	72	乞食とジミー ……………	104
三育小学校 ……………	72	ビザのスタンプ ……………	104
第8章 アフリカへ……………	74	第11章 ジミーの病気の再発	106
ソルシカレジ ……………	74	ロンドンへ ……………	106
オウムの話 ……………	75	ジミーの最後 ……………	107
ゲリラの襲撃 ……………	76	骨を背負ってインドへ ……………	109
ハワンゲ ナショナルパーク ……………	78	I. C. U. での体験 ……………	110
馬とロバ ……………	79	第12章 インドへ帰る ……………	111
マリアのケガ、救急病院 ……………	79	プナの空港 ……………	111
飛行機乗り遅れ ……………	81	告別式 ……………	111
悪霊にうなされる ……………	82	墓に眠る ……………	111
夢の家 ……………	82	悪魔の使い(コブラ) ……………	112
特別な洗足式 ……………	84	家政科の教師 ……………	113
ジミーの発病 ……………	85	クリスマスページェント ……………	114
急性膵臓炎 ……………	85	第13章 南アフリカへ ……………	115
神の声 ……………	86	スパイサーカレッジのリトリート	115
生食 ……………	87	ジェームス・バーレンド・ランキン	116
マダガスカル島への旅 ……………	87	第14章 日本からのコール ……	117
第9章 西アフリカ(トーゴ)へ	89	三育学院 ……………	117
クロバテメ村 ……………	89	舎監 ……………	118
教会建築と井戸掘り ……………	90	点呼 ……………	118
バプテスマ ……………	91	処罰 ……………	118
内乱、リンチ ……………	91	ルーマニアへ ……………	119
トーゴ脱出 ……………	92	ロシア ……………	120
アヒとピーター ……………	93	ブカレスト・ブラショフ・トウグムレシュ	120
泥棒の追いかけて ……………	93	ホストファミリー ……………	120
アマタン ……………	94	第15章 ユーチパインズへ ……	123
海の波 ……………	94	大流星 ……………	125
ヌード ……………	95	大分(N. S. V.) ニュースタートビレッジ	125
サーバント(使用人)物語 ……………	95	第16章 CAのアングインへ ……	126
チンパンジーの恋 ……………	98	後記 ……………	126
アフリカンダンス ……………	99		
ゴリラとの会見 ……………	99		
第10章 インドへ ……………	101		
スパイサーカレッジ ……………	101		
無農薬野菜 ……………	102		
リキショー ……………	103		
サリー ……………	103		

# 第1章 就職

## 宮城県の片田舎から仙台へ

県立佐沼高校卒業後、経済的な理由で、殆どのクラスメートが進学するのを諦めと羨望の思いで横目で見ながら、私は仙台の個人病院に看護助手として働くことになりました。卒業式が終わって、未だ春の遠い東北の四月の末のことでした。

田舎の小さな町（人口5千人）から生まれて初めて家を離れ、一人で他人の家で働くという体験は、私の人生の大きな岐路でした。

これで自分も親のスネをかじる生活から離れるのだという思いで、2時間半のガタゴトのローカル線に乗ったのでした。その汽車の響きは私の重い心を押してくれている様な、また、何とも言い様のない淋しい思いで私の心にひびいて来るのでした。

仙台は東北の森の都と言われており、近隣の町々からはいわゆる都会とされ、田舎の若者たちの集る場所で、東北大は学問の中心地でもありました。

高校卒業の前に恩師から大学の国文科で学んだらとの勧めもありましたが、教師になることには余り興味がありませんでしたのでやめました。

ともあれ、仙台駅前、東九番丁にある個人病院で働くことになりました。この病院は兄弟3人で小児科、産婦人科、外科を経営していた個人病院でした。

私の人生の岐路となった思い出深い忘れられない東九番丁、ここから私の

人生が進展して行くことになったのも神様の摂理でした。生まれて初めて不思議な宗教に接することになり、後に真理を知るきっかけとなったのでした。

彼等は“金光教”という生神を信じている家族でした。家族ぐるみで熱心に信仰していたことは私にとってはとても珍しく思えたのでした。

この宗教は南の方から発足したらしく、岡山県に本部がありました。

毎月10日が祭日で、その日は休診して全員が教会に行くのでした。また1年に1度は本部にお参りに行くという熱心さでした。

道徳的な善行の教えが主で、また面白いことに先生と呼ばれる人が信者の為にとりなしの祈りをささげていました。また献金が面白いシステムで収入の十分の一を捧げるという今まで聞いたこともなかった仕組みで、捧げれば捧げるほど祝福されるということでした。後で聖書を学んで知りましたが、いわゆる十分の一を捧げる什一献金の制度でした。

その昔、神がイスラエルの民に教えられた献金制度が、日本のキリスト教ではない宗教に取り入れられていたことは驚きでした。この教会の親先生と呼ばれていた方は立派な東大出の方でした。由来を伺ったら、西洋哲学と東洋哲学が合体して出来た宗教ということで、聖書の中から多くの教えが取り入れられている様でした。

7年間の仙台での働きは、看護助手というより病院の雑用から患者の世話一切、時には台所の仕事と、ありとあ

らゆる仕事をこなすスーパースタッフとでもいうのでしょうか、今考えれば良くも我慢出来たもの、と若き日の訓練の日々がなつかしく思い出されるのです。

神の与えられる体験は一つも無駄なものではなく、後に役立つ体験となるのです。

日曜日には友だちと連れ立って3本立ての映画を観に行くのが常で、良く映画館に通ったものでした。

その頃の洋画はミュージカルが殆んどで、片っ端から飽きもせず朝から晩まで良く観たものでした。

オードリー・ヘップバーンの映画が好きでした。ローマの休日、メリーピンズ、観た映画はその他沢山ありました。

そんな無意味な生活に飽き飽きし、人生に空しさを覚える様になった私は勧められるままに准看護師のテストを受けて合格。それは中学卒の受けるテストで簡単なものでした。しかし、合格はしたもののその学校に入る決心もつかず、結局私は7年間の働きに将来の夢を託せず、田舎に帰ることにしました。

今でも良く覚えています、その日は大雨でした。外科医の先生が“やらずの雨だね！”と言われましたが、その言葉は私の心をそのまま映していました。

これからどうするのか、自分では全然考える力も計画もありませんでした。空しい思いで大雨の中、暗い雨雲の様な心を抱えて、仙北線の列車に乗ったのでした。

そのまま田舎にいる訳にもいかないし、将来に希望もなく悶々と日々を過ごすうちに、やはり私は何か人の役に

立てる様な仕事をしたいと考える様になりました。

父の子供たちへの願いは、何か手に技術、資格を取ることにより立ちが出来る様にといいことで、娘たちも自分で学ぶ様にといい渡されていました。

手っ取り早く看護婦にでもと考え、日赤の看護学校を受験する決心をしたのでした。

学費無料、おこずかい支給という好条件でした。しかし、神は私に別の計画を持っておられたのでした。

“人の歩みは主によって定められる”という聖書のみことばを知った時に、私の歩みを振り返ってみて納得したものです。

兄は丁度その時、東京の労働省で労働基準監督官という仕事をしていました。日赤受験の話をししたら、二つ返事で賛成してくれるものとばかり思っていましたのに、何と彼の答えは“NO”でした。

その答えは面白いことに、医者や看護婦という職業は、病人という一番弱い立場の人間を看るといふ尊い仕事なのに、賃上げのストライキ等で病人を放っておくとは何事だ！というものでした。兄の思いがけない答えに私はいささかおどろきました。“お前はそんなストライキをする様な所へは行くな！”と反対されたのでした。

兄は労働省の役人になる前に早稲田の哲学科で学んだ人でしたので、若い頃はたぶん牧師か教師にでもなる心算だったのでしょうか？

第二次世界大戦の時、甲種合格の誉れある選りを受けていて、国の為にと神風特攻隊に志願した戦時中の若き英雄でもありました。

母の必死の祈りで陸軍ではなく海軍の潜水艦に配属されて、死なずに帰還

出来たのでした。

彼の親友は陸軍中佐の称号で、若い20歳の命を特攻隊の花と散って行ったのでした。

終戦がもう少し遅れたら、潜水艦隊で門司港に待機中だった兄も生きては帰れない運命だったのでした。

神を信じると告白した人だけでなく、神は必死に祈る人の祈りに応えられます。母親の子を思う愛と祈りは万国共通で、いつの時代にも神のよみされる祈りでもあります。

私は母の真剣な祈りの姿を弟の瀕死の時と、兄の軍服の写真の前で無事を必死に祈っていたその姿の中に母親の愛の強さを見てきました。その母の祈りは神に届き、きかれたのでした！

兄の反対に私は素直に従い、彼の言い分が正しいと思ったので日赤志願はやめました。しかし、はて、それでは何をとも考えても、私には情報不足で、有名な所に行こう、という考えしか浮かばず、“どうせ行くなら…”と東京の聖ルカ病院の看護学校に、と考えて願書を取り寄せたのでした。ところがまた、問題が起きました！

その頃私は千葉労災病院の救急室でアルバイトをしていました。それはとてもとても忙しい働きでした。

試験が何と3日間も必要ということに婦長に申し出たところ、“ダメダメ、こんなに忙しいのに3日なんてとても休みはあげられません！”と断られました。

それでは私はどうしたら良いの？どこへ行ったら良いのか全く分からず、彼女に良い所知りませんか？と尋ねたところ…“そうね、看護協会に聞いてみたら…”と言われて、早速電話したところ…“あなたの希望している様な看

護学校が、杉並の荻窪にありますよ！”と親切に教えてくれました。

これは神の摂理という以外の何ものでもありません！田舎者の私にとっては杉並の荻窪がどこで、衛生病院という病院がある事など知る由もなく、それがアメリカにあるS. D. A. という宗教団体に属していること等はずっと後で知ったことでした。

早速入学願書を取り寄せました。入試がたった1日で済むという一つの理由で、私がT. S. H. (東京衛生病院)を受験することを決心したのは全く不思議という以外にありません。

全く情報無しに人生の大切な受験という節目の決定に、余り考えもせず簡単に道の開かれるままに決断したことも、後で考えてみれば見えない神の導きであったと感謝するものです！

“人の道は神によって定められる”確かにその通りでした！目には見えなくてもそれぞれに人生のルールが神によって敷かれていて、その上を走れば安全で祝福されることも確かなことです。

私の人生はこの時以来、自分の計画ではなく、何か不思議な目に見えない力に引かれて行く様な感じで動き出したのでした。

神を信じるということがどういうことなのか、はっきりと理解はしていなかった私でしたが、この世界には何か大きな力が働いている事を自然界の不思議、人生の不思議から感じてはいました。

仏教と神道しか知らない田舎に育った者にとってはキリスト教との接触は、天地がひっくり返った様な感じで、こんな世界も世の中には存在したのか、と驚きと戸惑いの連続でした。

## 第2章 受験

### 入試

アルバイトの病院からは一日だけの休暇をもらって杉並の荻窪とやらへ…生まれて初めて一人で東京へ行くので、兄が心配して色々教えてくれました。

千葉駅から電車に乗って、お茶の水駅で中央線に乗り換え、荻窪の北口に出ること。それから教会通りを行くと病院の門に着くとのことでした。

彼は昔、早稲田の学生寮で荻窪の近くに住んでいたことがあったそうで、その辺りの事は良く知っていました。その頃荻窪は村で、林に囲まれていて、駅までほとんど何もなかったそうで、時々キツネが散歩していたと、信じられない様な話もしてくれました。

無事に東京衛生病院に到着！やれやれでした。

私は不思議と落ち着いていて何の不安もなく足どりも軽く、電車の乗り降りも前々から知っていた様に全てがスムーズで何か見えない天使が私の手を取って道案内をしてくれている様な、楽しい気分です試験場にたどり着いたのです。

テストはまあまあ、現役の学生でなかった私にとって、国語以外余り自信はありませんでした。その後の面接は面白い質問が出て、ちょっと変わった所だなあと思ったのです。

森田、高木、須藤先生という方がT. S. H. 看学の大御所の面々とは全く知らず、私はいとも堂々と落ち着いて面接を受けたのです。かえって何も知らなかったことが幸いした様でした。

受験の理由と趣味の欄には、正直に

堂々と、社会と人々の為に少しでも役に立ちたい、奉仕したいと偉そうな事を書き連ね、映画鑑賞、読書が趣味と記したのです。

その頃の私はキリスト教とは全く縁のない者でしたので、S. D. A. の信仰についてはチリ程の知識も認識も情報も持っていませんでした。ですから、平気で世的な調子で面接に臨んだのです。

森田先生が“あなた、ここでは映画鑑賞などできませんよ！それでも大丈夫ですか？”と問われました。私は“はい、規則ならそれに従います！”と答えたのです。

次に“あなたはどこでその態度を学びましたか？”と少々予期せざる質問もあり、“多分、祖母が厳しく躰けてくれましたので、彼女から学んだのだと思います。”と答えました。何か不思議な思いで面接を終え、一週間後に通知しますからと言われた言葉を“合格”と早合点して、晴々した気分一人でまた電車に乗って、間違わずに兄の家まで無事に帰ったのです。

兄は心配してT. S. H. の看学に電話して、私が入試に臨んだかどうかを確かめたそうです。本人はいとも呑気に不思議な明るい気分を満たされて“私はT. S. H. の看学で学ぶのだ！”と確信に満ちた安心感をもっていられたのは、今考えてみれば聖霊のお導きであったと確信できます。

一週間後に“合格通知”を手にした私は、見えない何か不思議な力に引かれている様な思いで入寮の準備をしたのです。

## 看学での三年間

昔の木造建てのサフラン寮で、せせこましくも賑やかな4人部屋での生活が始まりました。三人の先輩たちの中で私一人だけが未信者ということで、何も知らない赤ん坊の様な私を彼女たちは手を取り足を取り、1から10まで親切丁寧に教えてくれました。

キリスト教のキの字も知らない私にとってS. D. A. の寮生活は、天と地の差程の、珍しいというよりも奇異な感じで、何と不思議な所もあるものだと半ばあきれもしました。今更逃げる訳にもいかず、エイッ！と思いきってやってみようと腹をくくったのでした！

四時起き（土曜日以外）の毎日、病棟でのベッドメイキング、モーニングケアー、ベッドバス等など、看学の一年生は午前中を一生懸命実習し、昼食後はクラスというスケジュールでした。いい加減くたびれて、お腹が満たされると眠くなるのは自然現象ですが、しかし、それは許されないことでした！

私の前の席のクラスメートは良く舟をこいでいましたので、前後左右の友だちが彼女を見張って起こす役目を言いつかり、私自身眠気が襲って来ても先生の言葉に忠実に従う良き学生たらんと努めたものでした。

社会人として働いていた私にとって、久しぶりのクラスでの学びは順応するのにしばらく大変でした。新しい知識を一生懸命頭に詰め込んで、覚えるのに大変なエネルギーを使ったものでした。

解剖生理学の骨の名称、神経の名前等々今はほとんど忘れ、私のコンピューターにはインプットされてはおらず、きれいに消去されてしまいました。

毎日課題、テスト、レポートに追わ

れた看学での日々は、私の人生の中で最も忙しい時期でもありました。あんなに勉強した時期はありませんでした。看学と車の教習所は、もう二度と繰り返したくないと思ったものでした。

寝る時間も惜しんで、課題の学びとレポート、ケーススタディ、看護計画等に時にはベッドの中にもぐり込んで、毛布を被り、懐中電灯の小さな灯りで必死になって学んだあの若き日々。今はただただ、“あんな時代もあったのよね！”と笑いとばせるなつかしい思い出の一コマとなりました。ある学生はトイレの中で過ごしたとか…？

私が苦労したのは、宗教的なことへの順応でした。

キリスト教とは全く縁のない環境で育った田舎者の私にとって、セブンスデー・アドベンチスト教会という特殊な宗派は、土曜日が安息日といって、金曜日の日没から土曜日の日没までは聖日として雑事を一切せずに過ごします。こんなことは、聞いたことも見たこともない珍しい宗教で、とても奇異でなかなか順応が難しかったのです。

朝から晩までどこへ行ってもキャンパス中で集会や祈り、讃美歌が歌われていて、生まれて初めての私にとってはホトホト困り切って逃げ出したいと思った事も一度や二度ではありませんでした。

退学届を鞆の中に潜ませて、チャンスがあったら学科長の森田松実先生に渡そうと思って何度か試みたのですが…先生は何故か頭をタテには振って下さいませんでした。その度に励ましのおことばをいただいて学科長室を出た私でした。先生のお蔭で私は何とか頑張れて卒業できたのでした！

卒業後、図らずも母校の看学で働くという、思っても見なかった事態になった時に、先生方が一人ひとりの学生の

為に心を用いて下さり、祈って下さっていた事を知り、この学校はほかの学校とは全く違うのだということを知りました。

信仰という私の知らなかった世界。ここは小規模ながらキリスト教の基本的な目的、目標である他に対する愛と配慮を、毎日の歩みの中に生かして運営されていました。いわゆるキリストの愛の奉仕を模範に世界一のナースを育てるという遠大な教育目標を掲げた他に類のない小さなキリストの看護学校だったのです。

その素晴らしいキリスト教の学校に田舎者で何も知らなかった私が導かれたということは、神の愛の目に見えない不思議な力が働いていたからでした！

ほむべきかな、神の愛！“人の歩みは主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる。”詩篇 37：23

## バプテスマ

看学卒業前に森田先生から“あなた、もう聖書の学びは出来ましたよね。そろそろバプテスマを受けては…”と言われて、バプテスマ？洗礼という信仰告白の式であることは理解していましたが、いざ現実に自分の身にその事が起こったということは、何か別の世界に入っていく様な複雑な思いで、これも目には見えない聖霊の働きでした。

その当時、天沼教会の牧師であった柴田栄治先生と副牧師の堀健二郎先生がバプテスマクラスを担当して下さいました。お二人共東北の出身で、同郷という親しみと、お二方のお人柄に人を惹きつける力が宿っていて、面白く、楽しく、聖書の学びをさせて頂けたことは感謝でした。

看護学の学びよりも私にとっては聖書の学びの方が楽しくて、渴いた砂が水を吸収する様に真理を吸収したのでした。

“神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ。わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕う。”詩篇 42：1、2

バプテスマの日の事は今でもはっきりと記憶に残っています。

すばらしく晴れた9月の日でした。明るいブルーのスーツと青い空がとてもマッチして私の心も晴天でした！

9人の信仰の友と一緒にバプテスマの式にあずかったのですが、お一人だけしか記憶にありません。たぶん後にミセス金澤になられた方で、とても印象的な方でした。デザイナーのお仕事をしていらした方で、最初の頃は派手な服装、化粧、アクセサリーをつけて教会に出席しておられましたが、段々その服装、化粧が消えていって質素な目立たない様子に変わっていかれたのを覚えています。その後、確か三育学院で学ばれてすばらしいクリスチャンになりました。

人の人生は宗教によって大きく変えられるものです。それは聖霊の力によるものです。パウロの如くに…また多くの弟子たちの様に…

最大の奇蹟は人の心が変わることです。それは神のみことばの力です。聖霊によってみことばが人の心に植え付けられて芽吹き成長し、その人の全てを全く変えてしまうのです。いわゆる新生、再創造の力です！

“だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、全てが新しくなったのである。”コリント第二の手紙 5：17

バプテスマ槽の水の中に浸って古い罪の身が沈められ、死んで、新しい霊に甦ったあの時の感動は生涯忘れられないものです！何か周囲の世界がパァーッと明るくなった様な感じで、心も明るく軽く全てが新しくなった様な感じでした。喜びと希望が溢れて全く新生というにふさわしい不思議な体験でした。この日の為に、神は長い年月忍耐をもって私を見守り、日夜様々な事を通して、導き救おうとしてくださいました。また多くの方々の助けと祈りによって救いの道に入れて下さったのでした。

喜びと希望と感謝に溢れる思いで水から上がり、教会員の方々の祝福と握手を受けたあの日、あの時の感動は生涯忘れえぬ貴重な体験でした！

バプテスマ後の私は全く新しい人生を歩み出し、全ては御心のままにと委ねきる決心もつき、不思議な新しい人生のスタートを切ったのでした。

私はバプテスマの日に神と約束をしました。それは看学卒業時のクラスのマottoであった、イザヤ書6：8のみことばを私の新しい人生のマottoとすることにしたのでした。

“私がここに居ります。私をおつかわし下さい。”今でもこのマottoは変わっていません。何時でも何処でも、主が遣わされる所へ喜んで行くという心は持ち続けています。

恩師の森田先生が良くおっしゃっていました。“神が遣わされる所で働くことが、最善の道なのです。必要とされている所で最善を尽くすことが私たちに与えられた最高の恵みなのです。”と。

彼女の折にかなって語られた言葉が私の人生の大きな指針となって、今も

その時々心に甦ります。

教育は単に知識を与えるだけでなく、人の生き方に大きな影響を与える力があります。真の教育は、神のみことばに従った基本的な生き方を教えることであると私は信じています。神なしの人生は空しいもので、舵（かじ）のない船旅をする様なものです。

私の人生の中で真理（神＝イエス・キリスト）に出会ったこと、その真理を知るチャンスが与えられたこと、イエス・キリスト…道であり、光であり、真理であり、命であるイエス・キリストに出会ったことは最高最大の恵みでした！

“あなた方は主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。イザヤ書55：6”

私は小さい時からこの世界は何か大きな見えない力に動かされていると思っているところがありました。こういう自然天体の不思議も聖書の学びで一つひとつ暗闇のベールが光に照らされて剥ぎ取られて行くように分かってきました。また、人生の不思議や、疑問も少しずつ明らかにされ、理解できる様になって行ったのでした。

人は何者で、生まれ、生き、そしていつか死ぬという宿命は、罪という得体の知れない人の心の中に存在する性質が源であること、この罪の問題が解決されない限り、人の心には真の平安や救いのないこと、人生の目的、目標を神に出会って初めてはっきりと理解出来ました。

悶々としていた人生の疑問が一つひとつ解かれて、パズルの一片がパッチリと組み合わされて一つの完成された

絵になる様に、私の前途は何か明るい光に照らされているような感じがしてきました。

## 神の召命

看護学校卒業後、私の全く予期していなかった母校での臨床指導者としての召命は、小心者で臆病、引っ込み思案の私には大きな大きな重荷でした。人を教えるなど、もっての他でした。しかし、森田先生に勧められるままに、大きなチャレンジに挑戦することになりました。

一年間の研修を受け、日本一の小児科病院での実習も夢中で通り通し、さて、これから T. S. H. 看護学で実際の働きに就こうとしていた矢先に…姉妹病院である沖縄のメディカルセンターからコールを受けました。これは私の計画でも希望でもなかったもので、明らかに神の召命であると強く心に印象を受け、その場で私は沖縄行きを決心したのでした！

その後どうしても沖縄に行きたい！という思いは募るばかりで、思い切って森田先生に事情をお話しし、許可を頂こうと婦長室を訪れた時の私は小心者ではなく、何か大きな内からの力に押されて止むに止まれぬ思いで…“是非、沖縄の病院に行かせてください”と嘆願したのでした！

あの時の自分は自分ではないもう一人の自分がいて、行動している様な感じで、自分はどうしてもこの召命を受けて沖縄の病院で働くのだ、と何ものにも動かされない強い決心を促されたのは聖霊の働きによるものでした！

弱かった私にはこの様な言動が出来るはずはなかったので、我ながら驚い

た次第で、三度目にやっと森田先生も折れてくださって…“そんなに行きたいなら行きなさい！”と了解してくださったのでした。何とも言えない不思議な思いで婦長室を出た私は、前途が光り輝いている様な、そんなルンルン気分ですぐ渡航手続きを始めたのでした。

まずビザの申請のことで、今では考えられないことですが、1969年代、沖縄は外国でした。生まれて初めて品川にあった入国管理事務所の薄暗い事務所に、勝手もわからないまま何と一ヶ月も通い続けたのでした。

ある友人はこの手続きが嫌で、途中で断念したとは…ずっと後に聞かされた話！

“成せば成る”と一心に思い詰めて通った甲斐が実って、やっとスタンプをペタンと真新しいパスポートにおしてもらって、生まれて初めて私は外国に行くんだ！と、いそいそと見も知らぬ沖縄への旅を夢見ていたのでした。

沖縄行きは自分一人で祈って決めたことで、家族も友人たちも余り賛成はしてくれませんでした。必要な物を一人でまとめてうきうきしていました。未来の未知の生活をあれこれと想像しながらの毎日は楽しいものでした。それも外国に行って働くという何かとてつもない広い世界に飛び込んで行く様で、不安と期待の入り混じった複雑な思いでした。

準備を整え、美しい真新しい布団も袋に詰め込み、お嫁に行くみたいでした。

そして沖縄の様子も暑さも知らずに、いそいそと出発の日を待ったのでした。

## 第3章 沖縄へ

5月の雨の降る日でした。林医師の車で荻窪から東京駅の新幹線乗場まで送って頂き、ここでも“やらずの雨だね！”とか言われましたが…私の新しい人生の出発を神は嬉し涙で送り出して下さったのだと一人合点して、鹿児島島の兄の所に向かったのです。全てが生まれて初めての体験でした。

丁度そのころ、兄は基準監督官という労働省の仕事で鹿児島に在住しており、沖縄行きの船が鹿児島港から出航するというので兄宅に泊まることにし、しばしの別れを惜しむチャンスが与えられました。

翌日は鹿児島見物をし、おいしい義姉の手料理で私の門出を祝ってくれました。

夕暮れの、銀紙をもみくちやにした様な海にドラの鳴り響く音は何となく物悲しく、テープの流れが切れて、“ああ、別れなんだなあ”と実感しました。海がキラキラと輝いて送ってくれた義姉の姿が小さくなって見えなくなるまでデッキの上で、感無量の思いで沖縄への一人旅に発ったのです。今は古い絵を見るような感じで思い出される一コマです。

先輩の任期満了で沖縄から帰られた方が…“千葉さん(私の旧姓)、ミッションナリーはね、謙遜でなくちゃね！ 船は三等席で”…とおっしゃるので、正直に彼の助言を信じて三等席の切符を買って、鹿児島港から那覇丸の船底に座ったのです。

生まれて初めての船旅…それも外国へ…全く様子も分からずに意気揚々と乗り込んだものの…波の間に間に揺れること揺れること！

とうとう私は船酔いで気分が悪くなり立ち上がることもできず、食事も摂れず、頭はガンガン痛むし、吐き気はするしですっかり参ってしまいました！

やっとの思いでデッキまで這い上がり、外の空気を吸って少し気分が良くなりホッとしたのです。

20時間の船旅はかなりこたえました！もう二度と三等席には乗るまいと固く決心しました。多分、先輩はからかって私を試すつもりで言われたのかも？真疑のほどは分かりませんが。それ以来、船旅は私にとっては恐ろしいことで、余り興味はありません。別府から神戸までの一泊の旅が最後でした。この旅は予想外に快適で、ガタガタ揺れる音が何とも子守唄の様に心地よく響いて眠りを誘ってくれて楽しい旅でした。

船の中の風呂も面白く、ザブンザブンと波に乗っている様な気分でもとても愉快的な旅でした。

これは沖縄への苦痛の旅とうって変わったの“また乗りたい”と思った楽しい船旅でした。

5月の沖縄はもう夏真盛り！カーッと照りつける強い陽射しに目がくらんでしまい、やっとの思いで這い上がって迎えの車にあたふたと乗り込んだ私。全くの醜態でした。病院までの道は何も覚えておらず、恥ずかしい有様で、迎えて下さった方々には全く申し訳ないことでした。

どの位眠ったやら…数日間はベッドに横たわってしまった情けない自分！  
ミッシヨナリー第一歩は船酔いで全く参ってしまいました！

## A . M . C . での働き (アドベンチスト・メディカル・センター)

丸二日間は船酔いでのびてしまい、不覚の到りでした。生まれて初めての南国沖縄は、北国生まれの私にとって暑過ぎて耐え難く、湿度の高さは不快指数 100%！1970年代の A.M.C. はエアコンもなく、昼夜回りっ放しの扇風機が気の毒な状態でした。

1日に3～4回下着を交換しないと、べったり肌にくっついて気持ち悪く、その度にシャワーを浴びては交換したもので、勤務の合間に大急ぎで寄宿舎のシャワーを往復したものでした。

この体験は西アフリカのトーゴや、雨期のバングラディッシュでも味わった不快指数 90%以上の体験でした。多分神は沖縄でまず私を暑さに耐えられるように訓練してくださったのでしよう！

1970年代の沖縄は戦後のまだ落ち着かない時代でアメリカの統治下にあり、貨幣はアメリカンドル (\$) で、毎日嘉手納基地から軍用機がブンブンとベトナムに飛ぶ慌ただしい時代でもありました。私の唯一の楽しみは、昔の平和通りの古い商店街を端から端まで物珍しく見て歩くことでした。

様々な店が並んでいて、元気なオカミさんたちの声が響いて活気づいていました。特に海産物の店は賑やかでした。

このマーケットの様子は西アフリカ

のトーゴのマーケットに良く似ていて驚きました。トーゴは一夫多妻の国で女性が働いて一家を支えるのが常で、たくましい女性たちが店主として商売を営んでいましたが、沖縄も同じ様子でした。

露店の棚に果物がきれいに並べられて見事でした。この光景は沖縄独特で、余り本土では見られない光景でした。

サンキストオレンジの色がとても鮮やかに明るく目に映り、夏バテで食欲のなかった私は、このオレンジとブルーシールのアイスクリームで栄養補給をしたものでした。

時々“小紫”というレストランで鯛の塩焼きを食べたり、お寿司やおむすび、またお茶漬けを楽しんだこともなつかしい思い出となりました。

おむすび屋さんが屋根裏にあったのも面白いことでした。

A.M.C. の勤務は、外国人のミッシヨナリー・ドクターばかりのところ、英会話のあまり得意でなかった私にとっては恐怖でした。

T.S.H. でも幾人かの外国人ドクターと一緒に働きましたが、彼らは日本語を学び、日本の国家試験にもパスされた方たちでしたので、言葉はほとんど問題なく楽でしたが…沖縄はやはり外国でした！

あるドクターはカルテの文字がミミズが這った様で読解に非常に苦労したものでした。確かめに行くのと叱られ、とても怖かったのを覚えています。皆さん今頃どうしておられるのでしょうか？  
天国での再会が楽しみです。

## 出会い

“人生は出会いで定まる”と良く言わ

れます。確かにそうだとおなずけます。人の歩みの中で出会い程不思議で興味深いものはありません。

偶然というにはあまりにも劇的で不思議な出会いも沢山あります。これは偶然の様であって偶然ではなく、見えない神のご計画の中で成されているのだと思います。

この出会いで人は面白くも、おかしくも、素敵にもなり、様々な人間模様が繰り広げられて行きます。

私の人生の中での最も素晴らしい出会いは、イエス様との出会いでした。

この様に書くと、何か現実離れしていてキザに聞こえるかもしれませんが、確かに私はイエス・キリストとの出会いがなかったら生きてはいなかったと思うからです。

私の体験した沖縄での決定的な出会いは、私の人生を全くくつがえす程の劇的なものでした。考えたことも想像したことも誰も考えられない様な不思議な出会いでした。

## 1970年1月

この日、私は勤務が休みでのんびりくつろいで、ゆっくり友人と夕食を楽しんでいました。

その時、入口に異様な光景と物音がして、見たこともない大男が…2 m位は背丈があるでしょうか…肩に大きなバッグを掛けて入って来ました。またもう一人は対照的に小さな髭もじゃの足の悪い男性で、大男の後にヒョコヒョコくっついて何とも面白く漫画の様な光景でした。

大男がツカツカと我々のテーブルに

近寄って来て…“Hello”と英語で話しかけて来ました。そしてドカッと荷物を下ろして、何と私の向かい側のテーブルに座ったのでビックリして、私は英語が苦手ですと上手く話せなかったため、恐くなって逃げ出したい気持ちでした。

友人は英語が話せたので彼らと話してみると、何と彼らはアフリカからやって来た人たちだったのです。

丁度 Dr. ミットライダーのロマリダ大学の延長コース講座の Food production が一年間、名護の中学校で開設されるということで、わざわざ遠い遠い国アフリカ（南アフリカとザンビア）からやって来たということでした。

一人はジェームス・ランキンという、ザンビアからの大男、もう一人はアソー・デビアという人でした。これは友人の通訳で分かったことで、私は別に興味もなく、黙々と夕食を食べていました。実は恐かったのです。私は田舎育ちでそれまで外国人と接する機会がありませんでしたので戸惑ってしまいました。

“What’s your name?”と聞かれても、しどろもどろで答えるという恥ずかしさ。今の私なら臆することなく楽しい会話が出来たでしょうに…その頃の私はおとなしくて、人前で外国語を喋る様な勇氣は持ち合わせていませんでした。

ある人は信じられないと本気で言いますが…真実です。本人が言うのですから…。

彼らは香港のカオルーンという所で新しい病院建設の手伝いをしてきたとか。ジェームスはビザの件で数週間滞在を余儀なくされたということで、建築の仕事はお手の物らしく、本職は電気技師ということも役だって、病院の

建設現場で働いて来たということでした。

底抜けに明るくフレンドリーな彼はすぐに打ち解けて、しばらく夕食を食べながらお喋りをしていましたが、バスに乗って名護に向かって去って行きました。

このザンビアから来た大男が後に私の主人になる人だったとは、神ならぬ身の知る由もなし。全く不思議な出会いで信じられない様な話なのです。誰がこんな事を考えられたのでしょうか？

この出会いで彼はインスピレーションを受けて、私に出会ったその瞬間に“この人があなたの奥さんになる人です。”と神が語られたのだそうです。そして、私をアフリカのザンビアに連れて帰ったら母親（ママ）は何と言うだろうか？と思ったそうです。

神のなさる事は人間の思いや計画とは全く異なり、人の想像をはるかに超えて、私の人生に係わっておられたのでした。

これが自分の計画でも願いでも何でもなかったことは誰にも分かる事実でした。

“天が地よりも高いように、わが道はあなた方の道よりも高く、わが思いはあなた方の思いよりも高い。” イザヤ書 55：9

私はこの時の事などすっかり忘れて仕事に没頭していました。それから何ヶ月が過ぎて行きました。あの大男たちの事も私の脳裏から消えてしまって忙しい病院の働きに精をだしていました。

沖縄に来て淋しいことは淋しかったのですが、看護助手の訓練、教育という特別な仕事を与えられていたので忙しいながらも張り合いのある毎日でした。ベトナム戦争で病院がアメリカの

軍病院からの患者も受け入れていたことから、看護婦不足で看護助手が大きな働きをしていました。そこで彼女たちを教育・訓練するのが私の第二の役目でもあり、沖縄に呼ばれたのでした。

T. S. H. で臨床指導者の卵として駆け出した私は、一生懸命沖縄で汗だくになって働きました。

本土とは違った外国の雰囲気の中で、南国特有の人々の明るい開けっ広げの性格は、生まれて初めての私の外国生活を一層楽しくしてくれました。ハイビスカスの赤い大きな花が、いかにも南国らしくて鮮やかで、沖縄を象徴していました。病院の裏のバナナの林も珍しいもので、黄色に熟するのが待ち遠しかったものです。

野良犬が数匹仔犬を産んで、病院の裏庭に住んでいました。昼休みに仔犬たちと遊んだ楽しい思い出もあります。

マーティンさんというフィリピン人の小柄な目のクリクリした看護婦がいましたが、彼女は英語が良く出来て大活躍していました。英会話の出来る人は沖縄では重宝されて、看護助手の人たちの中でも良い働きをしていました。やはり人間はコミュニケーションの武器である言葉がとても大切で、人と人との接触は言葉によってつながります。イエス様が言葉と言われるのも分かります。

英語のハンディはとてもこたえました。教室に通って勉強もしましたが、なかなか上達せず、やはり語学は賜物と努力なのだとは半ば諦めて、辞書と首っ引きで二年間過ごした私でした。

沖縄の思い出は沢山ありますが、忘れられない思い出の一つにクリスマスの思い出があります。

クリスマス・イブにアメリカの基地にキャロルに行くことになり、有志たちが集って小雨の中、出かけました。私は幾人かから食事の招待を受けていましたが、お断りしてキャロルに参加することにしました。

故郷を遠く離れて基地で迎えるクリスマスは特別の思いがあったのでしょうか。私たちの歌を聞いてある兵士は感極まって泣き出しました。ホームシックで、小さい頃教会に行って歌ったクリスマスの歌を思い出して…と涙を流して感激していた姿が忘れられません。

ある家ではどうぞどうぞと家の中に招き入れて下さって、楽しい交わりが出来たことも素敵なクリスマスの思い出です。

私はクリスマスのご馳走よりも、この温かい人と人との交わりが出来たキャロリングに参加したことを心から感謝しました。

色々な事がありました！私にとっては人生の大きな岐路に立たされた忘れ難い土地、第三の古郷となった沖縄は、今もあのエメラルドの海と焼けつく太陽、ルートビア、ブルーシール・アイスクリーム、オレンジの味と共に、私の心に沸々と思い出の一コマ一コマが湧き出る忘れ難い心の古郷でもあります。

## デート

ある日、那覇教会の牧師から土曜日の午後ピクニックに行きませんかと誘われました。後で知ったことですが、これはジミー・ランキンが計画した私とデートするための意図的なピクニックでした。私を誘い出す作戦だったの

です。（※ジミーはジェームスの愛称）

ジミーが新垣三郎牧師に相談した結果の計画だったのでした。

“あの人（私のこと）は固物だからデートには来ないヨ！” 一対一では絶対にのらないことを牧師は良く知っておられました。確かにそれは事実でした。

田舎の父の家は、伊達家の家来の武士の家で、祖父はチョンマゲを結び、袴、羽織で大小刀を腰に下げていたという家柄で、固いことでは町でも評判の家でした。祖母（母方）はしつけに厳しい人で、デートなどもってのほか、という家で育った私でした。真面目の上に〇〇がつく位。それに男性との交際など、ましてや外国人の相手など考えたこともない人間で、結婚する気もなく、看護の道一筋に、ゆくゆくは留学したいと考えていた矢先でした。私の計画では一生看護学校の教師か、看護婦でいこうと、自分にはそこまでしか見えなかったのです。

しかし、神は全く人の思いも及ばない不思議な道を計画しておられたのでした！ 私の人生は、神が定めていて下さったのです！

“人の歩みは主によって定められる。人はどうして自らその道を明らかにすることができるでしょうか” 箴言 20：4

デートとは露知らず、ピクニックに参加した私。彼の計画にまんまとはまってしまったのでした。友人たちと楽しく過ごし、その日は植物園の美しい花や植物を心ゆくまで楽しみ、幸福な気分で帰路についたのでしたが、別に何のロマンスの匂いもない最初のデート？でした。

## プロポーズ

2月のある朝早くに、ドンドンとドアをノックする音で目が覚めました。私は夕勤（pm3:00～pm11:00）で疲れていて眠っていましたが、突然の訪問客に起こされたのでした。客は名護教会の新垣牧師でした。

何故こんな早い時間に牧師が私を訪ねて来たのか見当もつかず、渋々眠い目をこすりながら言われるままに彼に付き合わされたのでした。彼はあの日焼けした顔で元気良く“今朝はね、Good's newsを持って来たよ”と言われたのでした。“Good news?” 私には想像もつかないことでした。“とにかくそこに座りなさい”と主客転倒で彼の向かいに座らされたのでした。アパートのSitting roomで、野原さんはもう早い勤務で留守でしたので、私一人の静かな朝でした。

牧師は“単刀直入に聞くけど…アンタ結婚する気ある?”と聞いてきました。

“ありません”と私は余り唐突な質問にムツとしてハッキリ答えました。

すかさず彼は、“アフリカから来ているジェームス・ランキン知ってる?”“はい。噂で名前は知っています。一度彼が沖縄に到着した時、病院の食堂で会った事があります。”

“彼がね、アンタと結婚したいって言ってるよ!”と思いをかけないニュースにびっくり仰天してしまっていたのでした。まさか、こんなことが起こるとは…天地がひっくり返った様な驚きで、あっけにとられて口も開けなかった私でした。

私は震えてしまいました!あまりにも突然な想像もつかない事でしたから…。

しばらく間を置いて、私は…“今すぐお返事は出来ません。祈らせて下さい。そして、神様の御心でしたら従います!”そうお答えしたのでした。

牧師は、“ああそう、彼にそう伝えておくね”と去って行かれました。

それからの私は、さあ大変!取るものも取れず、どうしたものかと苦悩したのでした。考えたことも想像したことも、願ったこともない、人の常識では考えられない様なとんでもないことが私の身に降りかかって、決断をしなければならぬ事態になってしまって、私は全く我を失い、うろたえたのでした!

マリアが天使から懐妊のお告げを受けた時の様に、私にはとても信じられない事だったので。“おことばの如くになりますように。”そう祈る以外にはありませんでした!

それからの私は、我ながら今考えるとおかしな程に、小さな仔犬が親からはぐれてなきながら誰か抱き上げて愛撫してくれるのを必死に求めている様に、しばらくの間は迷い苦しむ日々を過ごすのでした。

## 祈りの日々

とても難しい決断を迫られて、やせ細ってしまった私は、神の御心を求めて必死に祈り続けました。

その昔、ダニエルがバビロンの捕囚としてネブカデネザルの王宮に連れて行かれた時に、彼は一日に三度窓を開けてエルサレムに向かって祈った物語は良く知られています。その結果、ライオンの穴に投げ入れられても、神が

ライオンの口を閉ざし命が救われました。そして王は国民にダニエルの信じる神を崇める様にと布告したのです。神は生きて働かれる神です。

私もホワイト夫人の勧告（青年への使命）に従って一日に三度、切実な祈りをささげました。一生の中で主人の病気の時、娘たちの危機の時の他、この結婚の決断の時ほど、真剣に祈った体験はありませんでした。食事が喉を通らなくなり、すっかりやせてしまいました。（43kg）

神は私に人の思いの及ばない道を開かれました。それは人の想像力では考える事も出来ない、願ったこともない未知の道でした！これには私も全く圧倒されてしまいました。

神の思いは人の思いとは異なることは知っていましたが、余りにも突飛で戸惑ったのです。

神ご自身はきっと楽しんでおられたのかもしれませんが。

アフリカからジミーを沖縄に連れて来られ、私を東京から沖縄に移されて…七夕の彦星と織姫ではありませんが、一生に一度の出会いをさせられて…。

暑さとこの思いがけないストレスは全く私を押しつぶしてしまい、サンキストオレンジとブルーシールのアイスクリームで何とか栄養補給をし、その場を繋いだのでした。

3ヵ月間私は夢中で祈りました！神はこの小さな器をどうなさろうとしておられるのでしょうか？

沖縄に連れて来られたのは、ジェームス・ランキンに出会う為だったのでしょうか？

神はどの様な青写真を私の人生にお持ちなのでしょう？

“主よ、御心をお示し下さい”と祈り

続けました！

## 夢のお告げ

名護と那覇は40kmも離れていて、私たちはほとんど交流もなく、特に私は外国人との交際などもっての他、恐ろしくて言葉もろくに通じない相手に対して何の興味も持っていなかったのも、ピクニック以来全く途絶えた関係で、まさか彼がプロポーズして来ようとは本当にショッキングな出来事だったのでした。

ある日の事、夕勤を終えてベットに入ったのは真夜中でしたが、（病院のアパートの一室に住んでいましたが、窓、ドアの鍵を常にしっかりと確かめてから眠る習慣でしたので、その夜も窓もドアも厳重にロックしていました。）疲れていたのですぐ眠ってしまいました。

早朝にとっても不思議な、夢とも現実ともわからない現象に驚かされて…ハッと目が覚めたのは午前4時きっかりでした。

その夢は、私のベッドの足元でジミー・ランキンがひざまづいて祈っている光景でした。私はビックリして飛び起きました。しかもその祈りは日本語で、私にもはっきりと分かるように聞こえたのでした！多分、天使が通訳してくれたのでしょう。

私は何事かとまたショックで身体が震え、周囲を見廻しましたが、誰もいませんでした。

“夢でした。”何という不思議な夢だったのでしょうか！

聖書の中にある夢で天使がヨセフに語った話は何度も読みました。しかし、まさか私に夢で神が大切なことを語ら

れるとは…またまた私はあまりの不思議な事に気が動転してしまいました。

彼の祈りは…“天にいます神よ、私は千葉さん（私の旧姓）と結婚したいと思っています。御心なら彼女をイサクにリベカを与えられた様に送ってください”という祈りでした。

思いがけないこの様な不思議に、私はどうしたことかと震えながら、神に問うたのでした。

“神様、このことはどうしたら良いのですか？”と…するとすぐに答えが返ってきました！“名護に行きなさい”とおごそかな男性の声が私の頭上右側の方から聞こえたのでした。それははっきりとした神の声でした。

私は早速、病院のトラックの運転手の方に連絡して名護の中学校まで乗せて頂くことにし、混乱した思いで名護まで雨の中、1時間余り、ただただ祈る思いでした。

中学校は坂を登りつめた丘の上にあり、雨の後の坂は滑り易く、とても歩きにくい日でした。一步一步何か運命の坂道を登りつめて行く様な、不思議な思いで登り着いた時、また私は驚きました。何とそこにジミー・ランキンが立っていたのでした！

彼はにこやかな顔で“Good morning! How are you? Why are you here, what are you doing here?”と、私もしどろもどろ、Broken Englishで…“今朝4時に不思議な夢を見たこと、そしてどうしたら良いのか神に尋ねたところ、名護に行きなさい！と言われたので、今、私はここに居るのです。”と…

彼はあたかもその事を知っていたかの様に…“ああ、そう”と大きく頷きながら、嬉しそうに“God answered my prayer.”と言ったのでした。

また続けて“I prayed at 4:00am,

and asked God, bring you here as Rebbekah for Issack.”とも私はまたまたビックリしました。私の見た午前4時の夢は、確かに彼の神への祈り、願いであったことを、はっきりと知らされたのでした。

神は彼の祈りに答えられたのでした。

相手の私が考えたことも、祈ったこともない願いであっても、神は一方的にそれが御心に叶うものなら聞かれるものなのです。

私にとって、天地がひっくり返る程の驚きであった彼のプロポーズは、大分前からの彼の願いであったということで、これもまた不思議でした。

## ジミーの願い

ジェームス・ランキンがザンビアで高校卒業後、大学の電気工学部に進学した頃、友人たちと映画を観に行き、日本映画“芸者ガール”という映画を観た後で、彼らはそれぞれに是非日本に行くと話合ったのだそうです。しかし、その後年月が経ってその事はすっかり忘れられてしまいました。誰も日本に渡る夢など実現しませんでした。

その後、数十年が経過し、ジェームスは不思議な導きによってS. D. A. の信徒となり、西部ザンビアのユカ ミッションで働いていました。

ある日彼は通信器を通してアマチュア無線の沖縄からのニュースをキャッチしました。20代の頃、軍隊で通信隊の隊長として働いた経験から、ミッションの通信を担当していた彼は、沖縄のA. M. C. のDr. キザイヤーからのメッセージを聞いたのでした。

何万マイルもの遠い島からのニュー

スは、ジェームスの心を捉えてしまい、彼は沖縄に行こう！と決心しました！

神は真に不思議なことをなさる御方です。彼には距離も時間も問題はないのです。無限、永遠の御方なのですから…。

ジェームスの心を捉えたニュースとは、1970年代、アメリカのロマリンダ大学の延長コースとしてDr. ミットライダーが開校していたFood productionのコースでした。

ジェームスは本業が電気技師でしたが、趣味が農業で以前から日本の農業を学びたいと考えていたので、これは絶好のチャンスとばかり、母親に相談したところ、二つ返事で“行きなさい”と喜んでくれたそうです。

ジェームスの父親は既に亡くなっており、母親が一人でザンビア北部の中心都市インドラ市で八百屋の店を営みながら1000エーカーの農場を管理し奮闘していました。女手一つで広い農場と店の経営は大変なことで、さすがの女傑のMrs. ランキンも大変な苦労だったのでした。

50人以上もの働き人を雇っての農場の仕事は大変なものでした。

その上、頼りにしていた長男ジェームスが遠い遠い国に行くことは物心共に彼女にとっては大きな痛手でしたが、彼女は息子の将来、また彼の願いを良く理解していて大きな心で彼を送り出してくれたのでした。

その彼女の度量の大きさは、夫の死後、ジャングルの大農場で一人ぼっちで銃を枕元に置きながら生きてきた女丈夫、時にはバーンと野獣を撃ったこともあるということからもわかります。私たちには想像もつかない訓練と体験を積んで生きてきた彼女故、スケールが名実共に違っていたことも確かです。

た。

ジェームスは母の勧めで力を得、早速日本（沖縄）への旅に出たのでした。

途中、香港ではパスポートの問題で留置場に入れられたという話もありました。

南アフリカのパスポートはその当時、アメリカの統治下にあった沖縄へのビザとして多少問題があった様で、しばらくの間、香港にとどまる羽目になり、カオルーンのS. D. A. 病院の建築のお手伝いをしたようです。しかし、このことは、我々の新婚旅行の時に、この病院に泊めて頂けることにもなり、“全てのことは相働きて益となった”のでした。ローマ8:28

## 決心

夢のお告げのこと、神の御声、牧師の伝言など、私は数ヶ月の必死の祈りの結果、この道は神が定められた道と確信して、彼のプロポーズを受け入れ、5月に婚約式を挙げることにしました。

式は7月4日、彼の卒業式の日を決め、案内状の印刷、発送、式の準備と忙しい日々でした。

私の家族がどう反応するだろうかと考え、手紙を書きました。天地がひっくり返った様なショックを皆に与えました。誰も考えられない様なことでしたし、私の家は町でも堅物で評判の家でしたので、余計に大変だった様です。

1970年代は、まだ国際結婚とか外国人との交際とかはあまり見られなかった時代で、その頃はそういう人は道徳的にレベルの低い人と考えられていましたから…。また、ましてや東北の田舎の事で、家名に傷がつくとか、後ろ

指を指されるなどと恐ろしい事を言われました。

母はあまりのショックで嘆いて嘆いて、とうとう病床に伏してしまいました。

“だから沖縄など行くな、と反対したのに” …と。

沖縄行きは、皆の反対を押し切って行った私の“信仰”による独断でした。

“信仰によって、神が導かれる所へ、私はどこへでも行く”と自分で決心していました。

“東京にとどまっていれば、こんなことにはならなかったのに…”と言ってみんな想像もつかないその頃外国だった南の島で、とんでもない事態に苦悶する娘の事を案じて母は共に苦しんだのでした。

“沖縄の暑さで頭が変になったのでは…”とも考えて、即、家に呼び戻し、精神病院に入れる計画までしていたのでした！

早速私は、この心配を解消するために、田舎の家に帰ることにしました。

ジェームス・ランキンのパスポートを借りて、彼の写真を見せて、彼がアフリカの黒人ではないことを証明することにしました。アフリカ人と聞くとすぐ黒人と考えるのが常でしたから…みんなそう思っていた様で、会う人ごとに質問されました。

写真を見せると、“ああ…！”とほっとして納得したという表情でした。

しかし、アフリカというとても遠い国にお嫁に行くことは、とてもとても想像もつかない、地の果てに行く様な恐ろしいことで、誰も考えられない事だったのでしょう！

みんな異口同音に“大丈夫？”“大丈夫？”と聞かれました。

私の頭の方が大丈夫か？という意味

だった様です！

昔の職場仲間は…“ハアアッ、アフリカね！”と呆れた顔をして、誰一人として“おめでとう”とは言ってくれませんでした。

しかし、多くの祈りの結果決心した私の心は変わりませんでした。

神が行けとおっしゃる所なら、神が共にいて下さるでしょうし、地の果てまでも神の御心に従う信仰によって、私はとてつもなく想像もつかない人生の旅に発つ決心をしたのでした。私の意志ではなくて押し出される様な力がまた働いていました。これは私が度々体験した、聖霊の力なのでした！

## 父との最後の別れ

父に呼ばれて、“ここに座れ”と言われて、相対し緊張した面持ちで言われた事は、“アフリカくんだりまで行ったら、もう簡単には戻って来れまい。一人で戻って来てもわしは引き取らないぞ。”と言い渡されました。“わしの死にも目にも会えないだろう”とも。

アフリカがどんな所か想像もつかず、ただ、遠い国、未開の国、黒人が裸で槍を持って動物の獲物狩りをしている写真を見たことがあるくらいのほんの少しの本の知識しかありませんでした。

ライオンや象がノシノシ歩いている姿など、野性的な場面しか想像することが出来ませんでした。

父は続けて…“お前が決心したことを反対はしないが、良く考える様に”と促されて、一応家族の納得、承諾を得て沖縄に戻りました。

これが父との最後の別れでした！親不孝な娘でした。

信仰に立つ時に、神が第一であり、他のことは二の次的になることも私は良く知っていました！

## 結婚式

三ヶ月間の苦悩と祈りの後、全ての事を神様の御旨のままに…と私の心は決まりました。

そして5月。沖縄はもう夏の太陽が輝いていました。名護の校長先生のお宅で婚約式を行い、祈りに支えられてアフリカからはるばる海を渡って来た大男ジェームスと洋子は、不思議な夢のお告げで結ばれることになったのでした。

私に迷いはありませんでした！しかし周囲は大変なショックを受けた様で、その年の重大ニュース（病院内）の一つに数え上げられたという事を後で知りました。

会う人ごとに“大丈夫？”と聞かれたことも頷けました。

婚約発表後二ヶ月目、ジェームスの卒業式の日1970年7月4日の夕に結婚式を挙げることにしたのは、アメリカの独立記念日にちなんで、自分達の独立をもかけて…二人共外国に来ていた様な生活で、何の準備もろくに出来ない状態でしたが、教会の皆さんがそれはそれは親切に面倒を見て下さり、助けて下さり、親身になって結婚式の準備をして下さいました。

ジェームスは日本の事にうとかったし、私一人でてんでこ舞いで彼の式服の心配をしたりしました。靴のサイズが見つからず、那覇中、歩き回ったのも今ではとてもなつかしい思い出です。彼のサイズは日本では相撲力士くらいしか履かないでしょう！

その頃の沖縄はアメリカの統治下にあり、外国と同じでビザが必要でした。現在の様に簡単に行き来出来ず、とうとう私の家族は結婚式には誰も出席しませんでした。とても淋しいことでしたが、信仰の違い、一仏教とS.D.A.の信仰は余りにも違っていました。一また、田舎の家族にとっては理解できない娘の突拍子もない決断に唯々呆れ、“あー、あー”と嘆息するのみだったでしょう。

思い切って父母には沖縄に来てもらい、幸福に満ち、神に祝福されて新しい人生の出発をする娘の晴れ姿を見て、納得して欲しかったのですが、しかし、それは実現しませんでした。

一人だけ家族の中でキリスト教の信仰を受け入れて、別の道を歩んでいた私。彼らにとっては不思議で理解できない世界に生きている人間だったのでしょう。私の家族は私の事を“変わり者”“突然変異”と呼んでいましたが無理もないことでした。全く価値観が異なり、目的、目標が違う生き方だからです。

## 1970年7月4日

名護のS.D.A. 中学校で行われたロマリンダ大学のExtentionSchoolの卒業式が、国際教会で盛大に挙行されました。

アメリカ人、日本人、フィリピン人、フィジー人、中国人、アフリカ人と、国際色豊かな卒業式はさすがに沖縄という島の特色でもありました。

日本の小アメリカともいえる様相で、本土にはない雰囲気と明るさ、フレンドリーな環境はとても親しみ易い沖縄の良さでもありました。

ガウンに帽子を被っての正式な大学

の卒業式は、あの頃の沖縄では珍しいことで、また、私は何か別の世界にいる様な錯覚を覚えたのでした。

結婚式の日、真夏日のそれはそれは暑い日でした。それも夜7時から、上の屋の丘の上の那覇教会で挙げました。

ジェームスの卒業式が午前中で終わり、その後お祝いのパーティがレストランで行われ、アパートに帰ったのは四時過ぎ、それから大急ぎで美容院へ。着付けの終わったのは午後6時55分、式の五分前でした。お化粧してもらっている間中、居眠りをしてしまい、何と慌てて目を覚ました時は驚きました！私の顔は真っ白に塗りつぶされてまるで能面の様な、なんとも不思議な変装ぶりで自分ではない別の顔が鏡の中にありました。“エエーッ”と驚いて、少し取って下さいと頼んだのですが…やり直すには時間がありませんでした！

今でもアルバムを見ると全く別の顔が映っていて…よく学生達に“これ先生？”と言われたものです。その時は“そうよ、私にもこんな時代があったのよ”とすましているのですが、あの時のことを思い出すと不思議な思いが甦ってくるのです。

タクシーで駆けつけてやっと式に間に合ったのでした。

ジェームスは控室でまだかまだかと待ちくたびれていたそうで、友人がからかって…“ちばさんは来ないよ”と言ったそう。

汗だくだくの結婚式はローソクの灯が消えない様にと天井のファンも止めてあり、全くの蒸し風呂状態で、出席者にも気の毒でした。扇子くらいでは

どうにも間に合わない暑さでした。

沖縄の夏はベトベト暑くて、借り物のウェディングドレスがぴったり体にひっついて、またその長袖の暑かったこと…暑がりな私にとっては、とても辛い体験でした。

一生に一度の晴れの日、喜びと苦痛を共に味わいました。

でも心が高揚している時には苦痛も半減するものであることも体験しました。しかし早くウェディングドレスを脱ぎたいと思いました。

何か自分ではない自分がある、これが現実？夢ではあるまいか？

バージンロードを歩いた時のあの緊張！このまま、天に昇って行けたらとも思った瞬間でした！

ジェームスもかなり緊張していた様子でしたが、私は彼の様子などほとんど見る余裕はありませんでした。2m近い身長彼の顔を見ることは、私の首をまっすぐに立て、後に反らせなければまともに見ることはできず、とても無理なことでした。

結婚するまで彼の顔をハッキリ見たことがありませんでした。嘘ではなくどんな顔をした人なのか、覚えていません。婚約時代にまっすぐに彼の顔を見たことがなかったというこれは笑い話のようなおかしい本当の話です。

外国人ということもあり、私にとっては何もかもが新しいことで大変でした。

良くもまあ決心したものだと、他人事の様、今思い出してもほろ苦い思いにひたる私なのです。

アルバムを開いてその日の事を思い出しては感無量になり、特にジェームスの緊張した姿を見ると胸がキューツと痛くなるのです。彼が生きていてく

れて、二人でアルバムをめくりながらなつかしいあの頃の思い出を語り合えたら…と、つい涙がこぼれるのです。

38年前の華やかなあの日の思い出から、今の私を想像することは全く不可能でした。先のことが見えないということは救いなのだと思います。

もし、ジェームスが私を置いて先に逝ってしまうことを私が知っていたなら…。

果たして…バージンロードを歩いて彼のもとに行っただろうか？

それは神のみが知られることで“その時々に応じて神の御心に従うこと以外に人間の幸福はない”のです。

父が来られなかったので、新垣三郎牧師が私の父親の代りにバージンロードを歩いて下さいました。御夫婦で仲人役もして下さいました。

司式は今は亡きヒリヤード牧師。ベストマンは照井見国さんと金城健祐牧師。通訳は津嘉山繁牧師。ブライドメイドは野原ヨネさんと屋比久成子さん。キャンドルライターは赤嶺ツヤ子さんと上地朝子さん。フラワーガールは森田ミリカちゃん。バイブルボーイは照井公基君でした。

那覇教会の皆さん、病院のスタッフの方々、友人たちに大変お世話になり、私の家族もジェームスの家族も出席しませんでした。同信のはらからに祝福されて新しい門出をスタートした私たちは幸福でした！

## 披露宴

病院の外庭でレセプションが持たれ、夕方の風がささやく様に吹いてステキ

な夜でした。

本土からの出席者は一人もありませんでしたが、沖縄在住人だけの特別な結婚式でした。

その頃はミッシヨナリーの人々、国際教会の人々、ジェームスの学友たち等々、国際色豊かな沖縄、それも教会ならではの賑やかさ、華やかさでした！

パーティーの一コマにウェディングケーキのカットとその後で新郎新婦がケーキを分け合う場面があり、私はジェームスに“お願いだから、少しだけ入れてネ”と頼みました。彼は素直にOKしてくれました。

司会者が“お互いにどれだけ愛しているか、ケーキの大きさを測って下さい”と言われたので、私はこの時とばかり、ドサーッと彼の口に大きなケーキを詰め込みました。あわてた彼は目を白黒させて、顔中クリームだらけになり、みんなドーッと大笑いをして盛り上がったのでした！

後でこのことも語り草になり、なつかしい思い出の一コマとなりました。

この日の為に、特別に琴の演奏を野原ヨネさんに依頼して、私の好きな曲“宮城野”を弾いて頂き感激でした！

彼女は不幸にして今は亡く、天国での再会を楽しみにしています。

今でもあの美しい琴の調べが聞こえてくる様で、一緒にアパートで過ごした日々、楽しく交わった沖縄での思い出がなつかしく思い出されます。

レセプションは楽しく和やかな雰囲気の中で遅くまで続き、昼の熱気冷めやらぬ空気の中に益々熱気を加えて行ったのでした。パーティーの終わったのが9時過ぎ。その後がまたまた大変！

私は急いでウェディングドレスを脱

ぎ化粧を落として、荷物の最終的まとめ！

スーツケース一つだけで20kgにまとめないといけません。何度も何度もはかりにのせてチェックし、あれもこれもと細々した物は結局あきらめ、友人の運転してくれた車に飛び乗り空港近くのホテルまで。到着したのは11時過ぎでした。

ほど良い風が吹いて、私は40分ほどの道のりをぐっすり眠ってしまいました。

真夜中、興奮いまだ覚めやらぬ中、ジェームスと二人で、その日頂いたお祝いの品々を開き、何か私は夢を見ている様な錯覚の中で不思議な思いに満たされていました。これは現実？この人と明日は遠ーい遠ーいアフリカへ旅立つの？これで良いのかしら？

疲れ切った私の頭の中を、様々の思いが飛び交っていきました。

新しい私の人生の門出、これからどのような道を歩むことになるのでしょうか？神ならぬ身の知る由もなし。大きな大きな冒険でした！

午前2時頃、灯を消した途端に窓の外でワァーッと喚声が挙がって驚き、何かかと思っただと下を見ると、何とジミーの友人たちがこの時まで待機していたのでした。悪童連のささやかなプレゼント。お祝いの喚声でした！

## ハネムーン（香港）

1970年7月5日 香港へ

飛行機が一時間も遅れてしまい、見送りは朝子さん一人という静かな旅立ちでした。昨日のほとぼりも少しづつ時の流れに従って覚めて行き、現実の中に引き戻されて行きました。これが

ら先の自分の歩みがどの様に進展していくのか？私はただただ神の導きのままに…と祈ることしか出来ませんでした。

あまりにも大きな一歩を踏み出した自分。右も左も知らずに、ただ、神の御旨と信じて誰も考えられなかった、自分さえも思ったこともない大きな大きな一歩を小さな信仰でスタートした自分。アフリカの大陸で何が待っているやら…アブラハムの様に不安と期待の交錯した思いで旅立った自分！

人はある時には、思いも及ばない事柄の前に自分でも思ってもみなかった勇氣と力が与えられることをこの時体験した私。“もうこれで良いんだ。全能の神が私と共にいて下さるのだから。”イスラエルの民が40年間荒野で導かれ養われた様に、私もその生ける神に従って行こう…と一人で再決心したのでした！私の心には一点の迷いもありませんでした。愛するジェームスと神がついていて下さるのだから、何の恐れもなし。前途揚々。

私は全ての物を残して、全く新しい人生に希望をもって進んでいったのでした。

沖縄よ、日本よ、サヨウナラ！再会を夢見て…。

## 香港

ここへは二度目。友人と観光旅行に来て少しは様子を知っていました。

べつとりと肌にまとわりついてくる空気は沖縄と同様、北国生まれの私にはあまり馴染めないものの一つですが、これからもっと大変な所に行くのかもしれない。

ジミーの友人の歯医者のお宅にお邪

魔して夕食を頂き、疲れていた私にはまたまた、チンプンカンプンの彼らのやり取りは、“あ、ここは外国なんだ”という認識を深め、日本語はもう通用しないんだと自分に言い聞かせました。

語学力のない自分にとって外国語は大きなチャレンジ。ボディランゲージも混ぜてもさぞかし不自由することだろうと、しっかり英語を学んでおかなかったことを後悔したのでした。

## チェンワン・ホスピタル

丁度この病院は、ジェームスが沖縄に来る前に新築中でビザ待ちの間、彼が建築のお手伝いをした病院でした。これが幸いとなって、東京衛生病院から転勤して来られた事務長のバーチャードさんがご親切に私たちに真新しい部屋を提供して下さり、香港滞在中ホテル並みに無料で使わせて頂いたことは有難いことでした。

神はいつでもどこでも、頼る者に最善の恵みをもって祝福して下さいます。

“主の恵み深きことを味わい知れ、主に寄り頼む人は幸いである。” 詩篇 34 : 8

## 結婚詐欺？

香港三日目の朝、私は少しベッドにも馴れて眠れる様になり、その日は何と10時過ぎに目が覚めたのでした。静かでした！洗面所に行き顔を洗い、歯を磨き、着替えをして…さて、今日は…と周囲を見回しても音もなく、彼の姿もなし。多分眠りこけていた私をソーッとしておこうと病院の友人の所へでも？と思い、私は一人でゆっくり

しましょう。そのうち帰って来るでしょう。”とのんびりしていたのでした。しかしお昼になっても彼は帰って来ませんでした。少しおかしいなあと思いました。何のメモも書き置きもなし。私は病院のスタッフの人々に聞いてみました。“ジェームスを見かけませんでしたか？”と。

しかし、知らない、見かけなかった、という返事が返ってきました。

不思議です。出て行く時は必ずフロントを通るはず。夕方になっても彼の姿はなく、音信もなし。最悪の予感にさいなまれ、“結婚詐欺？”“まさか？”お金もない彼が何の為に？面白半分？私をからかったのか？

私はいても立ってもいられず、病院中を歩き回ったのでした。まるで迷子の仔犬の様に…。

しかし、いくら待っても彼は帰って来ませんでした。あたりが段々暗くなって、病院は静けさが広がってきます。その頃私たちの泊まっていた階はまだ使用されておらず、全く人気がなく淋しい限りでした。こんな時、ネズミ一匹でも仲間がいてくれたら、どんなに慰められたことかしれません。

外国で一人ぼっちということは何と心細いことかと…それも信頼していた人に置き去りにされた状況では尚更のことでした。

私は泣くにも泣けず、涙も出ない位恐ろしい緊張と不安で震えていました。

何時間、時が経過したのでしょうか。くたびれて疲れきって、どう仕様もなく、ただこれから一人で日本に帰る訳にもいきません。父に“お前が一人で帰って来ても引き取らないぞ！”と言ひ渡された手前もあり、おめおめと帰ることは私の負けで、“そーれ見ろ、だからあれ程良く考えて決めろと言った

のに…”と言われることは確かでした。

ぐるぐるあーでもない、こーでもない、と頭の中は滅茶苦茶。こんがらがってしまった糸の玉の様に、何とかして解決の糸口を見出そうとしても何も出て来ませんでした。

くたびれはてた私はベッドに入り、このまま消えてしまいたい思いで祈ることさえできなかったのです。

そんな私の苦悩も知らず、ジェームスは10時頃ニコニコしながら意気揚々と帰って来たのです。私は張りつめていた気分が緩んで、涙がドットとめどなく溢れて仕方ありませんでした。

彼を滅多打ちして今までどこで何をして来た！？と詰問する私に、彼はなぜ私が激怒しているのか、理解できないらしく、キョトンとして…“ゴメン、ゴメン”と謝るばかり。どうして何の連絡もしてくれなかったのか、今後この様な事のない様にと切実に訴えたのです。

彼は今朝4時に、カオルーンにあるDr. ミラーの三育学院の食品工場で、健康食品の作り方を学んで来たのだそうです。帰りのフェリーが遅れて早く帰れなかったということでした。

とにかく無事に帰って来てくれて一安心！それにしても人騒がせな人でした！

多分、アフリカ育ちの彼にはあまりそんなことは気にならないのでしょう。電話もない環境で育った彼には、連絡する習慣はついていないのです。それはその後、何度か同じ体験を通して理解したことでした。

彼のこだわらない大らかな性格と、アフリカという日本では想像もできない様な広ーい広ーい大自然の中で生きて来た人との生活習慣の相違でもあり

ました。

この事件以来、Dr. ミラーの工場に行く時は、私も一緒について行き、健康食品作りを体験し、結婚詐欺事件とはお別れしました。

Dr. ミラーは、チャイナドクターと言われた献身したミッシヨナリーで、二人も奥さんを栄養失調で亡くされたとか…。畑の肉と言われる大豆を使って健康食品を作り、安価で中国に広めたことで、また、豆乳Dr. ゴイターの手術でも有名な医者でした。

全く主に献身して用いられた素晴らしいクリスチャンでした。

ある日、ご自宅で昼食を頂いた時に彼の健康法を色々伺いました。私たちがお会いしたのは90歳の時でした。お年の割に非常にお元気で、早朝から工場で働かれ、朝食後はクリニックで手術、外来治療とお忙しいスケジュールをこなしておられました。

“働くことは健康の秘訣です”とおっしゃって、多分100歳近くまで現役で過ごされた、素晴らしい医事伝道者でした。

数々の思い出を残して香港を後にし、インドへと旅立った私たち。そこでもまた、モンスーンという自然の驚異が待っていたのです！

一週間のハネムーンは色々なハプニングの後にあっという間に過ぎて、いよいよアフリカに旅立つことになったのは7月の末でした。



## 第4章 アフリカへの旅路

### インド（ボンベイ）

インド経由でケニヤに渡り、ザンビアに行く計画でした。

ボンベイに着いた頃には丁度モンスーンの季節で、毎日毎日ひどい風雨に見舞われて、ボンベイの町は水浸し、残念ながらあまり外出は出来ず、ホテルの部屋3階から外を眺めて数日を過ごしたのでした。

その時、私の目に映った光景は今もはっきりと私の脳裏に残っています。それは激しい風雨に街路樹は身悶えして、今にも折れそうになっている木から、細い体のサリー姿の女性が一生懸命木にしがみついて葉をもぎ取っている姿でした。多分カサバの葉で食材として貧しい人々が用いるものでした。

町の中は水浸し、人々は裸足で足首の水をこいで歩く始末。靴を手にとって汚い水の中をこいで歩くのは気持ちの悪いものでした。町は汚物で異臭を放ち、段ボールの家にビニールシートを被せて住んでいるホームレス、家々の軒下に雨を凌いで寝ころんでいる人々。橋の下にも大勢の汚れた人々が寝ころんでいる様子は、私の目に異様に映りました。

スラム街の泥にまみれた裸の子供たちや、動物と同じような生活をしている人々を見た時に、何とも言いようのない哀しみが私の心にこみ上げてきました。それでも、泥まみれで洗ったことのない縄紐の様な頭をして裸で、鶏、豚、犬と一緒に喜々として走り回っている子供たちの姿は、一抹の喜び、光でした。

このインドで主人は働かないかと誘われたそうで、私にどうかと聞いて来ました。即座に“No”と答えました。とてもこの環境に住むことは、日本人でナースの私には自信がありませんでした。

21年後にこのインドで働く様に召されたのは、神の不思議な摂理でした。

ボンベイのホテルの番号が361で、沖縄のホテルと同じ番号だったのも面白い偶然でした。また面白いことに、ホテルの食事を向かいの店から買って来て供していたのもインドらしいことでした。

### ケニヤへ

ボンベイを後に、いよいよ我々の最終目的地、アフリカ大陸への旅は生まれて初めての長旅で、私にとってはそれはそれは大変な旅でした。

羽田→沖縄→香港が私の飛行機の旅の全てでしたから…。10数時間の飛行機の旅は、愛する人との旅とはいえ、とても疲れる、辛い旅でした。

ケニヤの空港では何と6時間の待ち時間を木のベンチに座って過ごしました。この体験は、私にとってとても疲れきってしまうものでした。涙がこぼれて仕方ありませんでした。どうしようもない心身共に疲労困憊とはあのことだったのでしょう。

寒気がしてベンチにうずくまっていた小さな日本の花嫁を、ジェームスはとても心配して“大丈夫？”と何度も

やさしく介抱してくれました。

生まれ故郷を遠く離れて全てのを後に残しての旅立ち。この余りにも厳しい現実には、初めて自分がこれからどの様な道を歩むのか、垣間見せられた様な思いでした。

ジェームスがどんなに大変だったことかと今考えると、彼に同情する気持ちが湧いてくるのですが、あの時はそんな余裕は全くなく、自分の事だけで精一杯だったのです。

彼はくたびれきった私をいたわってくれて、彼の上衣を脱いで私の肩にかけてくれました。ダブダブの彼の上衣は、まるでコートのように私の寒い心と体を包んでくれたのです。

横になりたかったのですが、私たちの他にも沢山ザンビア行きの待ち客が居て、ザワザワ落ち着かない雰囲気はまた私の不安な思いを増加させることになりました。

何か異様な臭いと空気が満ちていて、薄暗い空港の待合室は、黒人たちが動き回る度に私の心を揺り動かしました。

生まれて初めてのこの体験によって、遠く故郷を後にしてアフリカという未知の世界に来てしまったのだということをはっきりと認識させられたのです。

今まで私の住んで来た環境とは全く異なったこの環境はとても不思議なもので、馴れない聞いたこともない言葉、全く意味の分からない言葉は異様な感じでした。

何か身の縮まる不安を感じる思いで、長い待ち時間、複雑な思いの交錯する言いようのない孤独感に襲われて、涙が溢れて来るのをどうしようもなかった私…。ジェームスはどんな気持ちでこんな花嫁を見ていたのだろう。“困ったことになってしまった”と私との結

婚を後悔したのでは？と後で聞いたことがありました。しかし、彼は一度もその様な言葉を出したことはありませんでした。

## ザンビア

1971年7月31日、夜半、ザンビア到着。

長い旅の末にやっとザンビアに到着しました！ケニヤで6時間もの待ち時間があり、暑い夏の国から旅立ってきた私にはアフリカの冬が寒いという認識は少しもありませんでした。薄い夏服で震えた体験は、アフリカにも寒い冬があるという最初の認識でした。

ルサカ国際空港はとても立派で大理石でできた近代的で広々とした建物に私は目を見張りました。信じられなかったのです！驚きのあまり“ジミー（ジェームスの愛称）、ここが本当にザンビアなの？”と問うたのです。彼は笑って何も答えませんでした。

ケニアの木のベンチの薄暗さとは対照的な信じられない光景でした。

ベージュ色のピカピカ輝く素晴らしく明るい空港が我々を歓迎してくれて、何か前途も明るい希望に輝いている様でした。

しかし、何と寒いこと！私は寒さに震えながら興奮していました！

彼のビザが7月31日で切れるということで、丁度その日のうちに到着したことも不思議でした！

迎えにはリバーサイドファームのDr. ホスター夫妻と、教会の牧師夫人が冬のコートに身を包んで待っていてくださいました。

確かにアフリカにも冬があったのです！それも地球の裏側が真夏の時、こちら側は真冬なのでした。私は全く認

識不足でした。

ジミーは友人の質問、私の質問にはほとんど答えてくれず、“行ってみたら分かる”との一言でした。“ボクが説明しても信じないだろう。TVや写真で見ることしか信じないだろう”とも言っていました。道をライオンがのし歩いたり、裸の現地人が槍を持ってハンティングしている姿、ドラムを叩いて踊っている黒人たちなど、それがアフリカと知っている人たちがほとんどでしたから…。

ルサカ空港の近代的建物に驚いた私は、次はどんなびっくりが待っているやら…興味津々でザンビアの第一歩を踏んだのでした！

ザンビアはアフリカでもその当時(1970年代)はとても豊かな国で、銅の輸出国として栄えていました。店にはヨーロッパや、中国からの輸入品が並び、ほとんどの必需品は手に入れることができました。

カウ ندا主相の政策が効を奏していた時代でワンザンビア・ワンネーション(one Zambia, one nation)がモットーとして人々の間に行き渡っており、いたって平和な美しい国でした。

しかし、10年後のザンビアの衰退は見る陰もなく、道はボコボコ穴だらけ、店はほとんど商品がなくなり、昔の面影は何処にも見られず、雑草が風に吹かれる姿は憐れで、何がこの国をこれまでに落ちぶれさせたのか？と信じられない不思議な思いに捉われたのでした。

“もしあなたが、あなたの神、主の声によく聞き従い、わたしが、今日、命じる全ての戒めを守り行うならば、あなたの神、主はあなたを地の諸々の国民の上に立たせられるであろう。”申命記 28:1

## ザンビア共和国

(昔のローデシア)

### 1. 地理と気候

1964年ローデシアより独立。

赤道の南。南緯 10℃～17℃、アフリカ中部の内奥部に蟹が双方のハサミを広げた様な形の国。ほとんどサバンナ地帯。

### 2. 面積

日本の二倍強。イギリス、フランス、ポルトガルの3ヶ国がすっぽり入る位の広さ。

### 3. 人口

500万人位～1979年には950万人に増加。

### 4. 名称の由来

母なる大河ザンベジ河から来ている。

### 5. 標高

1300m。緯度は熱帯であるが、気候は亜熱帯性で比較的凌ぎ易い。

### 6. 主都

ルサカ(人口約40万人)、キトウイ(約25万人)、インドウラ(約23万人)

### 7. 季節

一年は二期に分かれ、

雨期—12月～4月でスコール(豪雨)

乾季—5月～8月(冬期)

9月～11月(夏期)

### 8. 人種

バンツ一族一言語学的分類による。

黒人はバンツとニグロに分類され

る。72の部族が住んでいる。

## 9. 主食

ンシマというトウモロコシの粉で作った団子の様なものに野菜、肉、魚等のオカズをつけて手で握って食べる

## 10. 経済

銅の輸出で景気の良かった頃は豊かであった。95%は輸入に頼っている。

主人はカウンダ主相の農業部のアドバイザーを長年務めていたが、政府は工業に力を入れて、10年後には銅が下落。国状は見る影もない有様に衰退。

ジェームス・ランキンが国の繁栄には農業の推進を図ることが大切との助言を惜しまなかったのです。

## 11. 習慣

ビールの消費量は世界でも高く、背中の赤ん坊にビールを飲ませるといふ実話もあった。

## 12. 観光

- ①ビクトリアの滝 幅2m、高さ100m、ムシオトニヤ（雷鳴轟く煙の意）と呼ばれそのすごさは世界でも抜群。煙は水煙でかなり遠くからも見られる。
- ②ルワンガナショナルパーク（自然動物園）—16ある動物園の1つで、6万平方キロメートルの広さを持つ。その他にハワング、カフェ等もあり規模はルワンガには及ばないが見所のある動物園である。我々は毎年ビクトリアの滝の近くにあるハワングで休暇を過ごしたものです。
- ③サファリ（スワヒリ語で旅の意味）—オープンカーに乗って自然

の中の動物を見物する旅。夜間のサファリもまた面白いものです。

- ④カサバベイ—タンザニア、マラウイ、ザイールの国境近い秘境。タンガニカ湖、ビクトリア湖に次ぐ湖で沢山のワニが住んでいる。

ナイルパーチといって1m以上もある大魚も釣れる湖と河川でボートも楽しめる。

ザンビア人は平和主義で内乱はほとんどなく、独立戦争の時も死者は出なかったという。

一般にアフリカは生活のテンポが遅く、私は“パンゴノ、パンゴノ（スロースロー）”にはいらいらさせられたものでした。

一日中、道端に座ってバスの来るのを待っている人もいます。バスが来なければ、また明日！

ヒッチハイクの多いのもアフリカの特徴。アフリカといっても、それはそれは広いのです。アフリカ大陸といわれるくらいですから。

私が最初に住んだのは中央アフリカ。アドラの働きで東部、西部、南部とほとんどの国々で働く機会がありました。

## リバーサイドファーム

(Riverside farm)

カフェ河のほとり、主都ルサカから30分程南方に、引退したDr. ホスターの3,000エーカーの広々した農場があります。今でも自給伝道のセンターとして活動する中部アフリカの中心として多くのプログラムが持たれ、続々とミSSIONナリーが養成されている場所です。自家用機も飛ぶ広さで、息子さ

んと奥さんはパイロットの資格を持っていました。今はアメリカで働いておられます。

私たちは整形外科医の息子さんのお宅にしばらくお世話になることになりました。

## バオバブの木

家の裏に大きな大きなバオバブの木（モンキーブレッドの別名）がありました。

大きな茶色のサヤの中に白い粉が入っていて、これをモンキーたちが食べるのだそうです。この木はアフリカ東、中部に多く見られる面白い形の木です。根が空中に浮き上がっている様な、沖縄のガジュマルの木に似た大木で、この木にまつわる話をジミーが旅の車の中でしてくれました。

彼は話題が豊富で色々な事を知っていました。ミセス照井が“ジミーは一人で色々話すから聞いていれば良いのよ”と私が正式にお見合い？した時に話して下さいました。

彼の父親がとても面白い人だったそうです。父親譲りの話好きで、友好的で、沢山の友人を持っていたことも彼の人の好き、優しさのためでしょう。

創世の昔、神が動物たちを集めて会議を開いてこの地球に木を植えるということになり、それぞれ木を植えに行った時のこと、どうした訳か、ハイエナを招待するのを忘れてしまったとか…。そこで立腹したハイエナは植えた木を根こそぎ引き抜いて逆さにしてしまったのだそう…。それがバオバブの木なのだそうー！…ホントかウソか？

## バブーンの話

この話もジミーが面白おかしく身振り手振りですてくれた話です。

バブーンは猿の一種です。かなりどう猛な動物で、長い歯で噛まれたら大変！アフリカではちょっと田舎道に行くと沢山いて、一見おとなしそうに見えますが、とても危険な動物です。

これも昔々の物語。

バブーンは粹な動物でいつもハンティング帽を真深にちょっと斜めにオシャレにかぶっていました。それがくっついて今の様な顔になったとか…？！

寒い日に火で手をあぶっていた時に、うっかり居眠りしてひっくり返りお湯に浸ってお尻の毛がなくなってしまったとか…？手も指もその時の火傷で皮が剥がれてピンクになったとき…？これも信じられない話です。

## ジェームスの生家への旅

ザンビアに到着した翌日早朝に、私たちは彼の生家に義母（ママ）に会いに行くことになりました。カフェから450km、北方ザンビア第二の都市、インドラの近くの農場に彼女は住んでいました。途中、カブエ、カポリンボシという町を過ぎて、ミエングエ農場まで。主道は全て舗装路で、問題はありませんでした。

初めてこの目で見るザンビアの大自然。行けども行けども延々と続くサバンナ！人っ子一人見えない広さ、家もなし。一体、人間はいるのかしら？とジミーにたずねたのでした。

…2時間も走っても一人も人に会いませんでした。車も通り過ぎることはありませんでした。“ああ、これがアフ

リカ大陸なのだなあ！”と合点した私。これから何が出てくるやら楽しみでもあり、新しい人生がどの様に展開していくのか、神のご計画のブループリントは？

やっと何時間か走って主道から村道に入りこれからいよいよ彼の生家へ行く道のりは5 km程のデコボコ道です、途中の村々では草深い小屋の立ち並ぶアフリカ独特の風景が広がっていました。村人たちが出て来て挨拶をする様子も独特のマナーがありました。左手で自分の胸を軽く叩いて、次に手を握るこのしぐさに意味があるのだそうです。

道端にあった小さな店のオカミさんは義母の友人でもあるそうで、ジミーはなつかしようにベンバ語で話していましたが私には片言も理解できませんでした。

ザンビアには72の部族があってそれぞれ言葉が異なるそうで、方言はその地方の人でないと良く理解できない様でした。

ベンバ語、ランバ語、チラパラパ語が主に語られていて、ジミーは何種類かの方言をマスターしていました。恥ずかしながら私はこの一つもマスター出来ませんでした。“マシブケニ”おはようとか“エーヤムゴワイ”元気ですか？位しか覚えていません。

ザンビアでもカフエ地方はまた異なった言葉で、“マブカ、マウカブアンジ”おはよう、元気ですか？とか。

二人の娘たちは村の子供たちと遊んでいましたので、ベンバ語はペラペラでした。秘密のことを話す時は私に分からない様にベンバ語で話してました。今はすっかり忘れてしまった様で、上の娘は南アでズル語やアフリカーンズとって移民たちの作ったオランダ語に似た言葉をしゃべります。

ジミーはきっと母親に一刻も早く会いたかったのでしょう。私を古い木製の門の所に残して急いで行ってしまいました。その時、私はあることを思い出しました。ある日ジミーが、“実は…”と真顔で言った言葉でした。“アフリカはネー、一夫多妻なんだヨ”と…。もしかしたら…これから私は彼の他の奥さんに会うのかも…？と考えたら足がすくみ、体が震えて前に進めませんでした。

私は複雑な思いで、ゆっくりゆっくり草道を家の方に歩いて行きました。草ぶきではなくて、トタン屋根の家が見えて来ました。何か恐ろしい思いで、何が起こるのかとても不安でした！

義母はブルーのオーバーオールを着て外で働いていました。背の高い美しい人でした。ジミーは傍らで嬉しそうに笑っていました。私は他に誰がいるかしら？と見廻しましたが、誰もいませんでした。

“Welcome, my Japanese bride! (いらっしゃい、わたしの日本の花嫁さん)”と義母はギュッと私を抱きしめてくれました！その大きな温かい胸の感触が私を安心させてくれ、“ああ、私はこの家のお嫁さんになったんだ！”と何かこみ上げてくるものを禁じ得ませんでした。

小さな日本の花嫁は、この大自然の中の農場主の長男ジェームスの妻として、これからアフリカで全ての事を吸収し、義母と仲良く生活して行こうと決心したのでした。

義母は義父の死後(1969年)一人で農場の経営とインドラ市にある八百屋の店を守っていました。女手一つでジャングルの中の一軒家に住み、銃を枕元に置いて猛獣の襲撃に備えるという様な強気の女丈夫でした。

ライオン、ヒョウ、ゾウ等も住んで